

蔵王町文化財調査報告書第1集

堀の内遺跡

1997年3月

蔵王町教育委員会

目 次

第1章 遺跡の概要と周辺の遺跡	1
第2章 調査に至る経緯と調査方法	4
第3章 発見された遺構と出土遺物	8
第1節 積穴住居跡とその出土遺物	8
第2節 その他の出土遺物	39
第4章 考 察	43
第1節 出土遺物の考察	43
第2節 積穴住居跡の考察	47
まとめ	51
引用・参考文献	
写真図版	

調 査 要 項

遺 跡 名 堀の内遺跡（ほりのうちいせき）宮城県遺跡地名表登載番号 05084
所 在 地 宮城県刈田郡蔵王町大字円田字堀の内・字寺坂
調 査 原 因 農道白山八堀線の改良工事に伴う事前調査
調 査 面 積 約1,000m²
調 査 期 間 1996年(平成8年) 6月5日～8月23日 (実働39日間)
調 査 主 体 蔵王町教育委員会
調 査 協 力 宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員 宮城県教育庁文化財保護課……三好秀樹・高橋栄一・吉野 武・藤村博之
蔵王町教育委員会……佐藤洋一
作 業 員 我妻キヨエ・大庭千恵子・折居いと・会田康則・鹿島泰子・齋藤美代子・
平間由香利・神子田節子・村上和明・渡辺たみ

例　　言

1. 本書は、農道白山八堀線の改良工事に先立つ、堀の内遺跡の発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 本調査の結果については平成8年度及び9年度の宮城県遺跡発掘調査成果報告会において発表しているが、本書の記載内容がそれらに優先されるものである。
3. 本書における土色の記述は「新版標準土色帳」(小山・竹原 1973)に基づいている。
4. 本書における遺構・遺物の縮尺は以下のとおりである。

遺構配置図（第3図）…………… 1／300

遺　構…………… 1／60

土　器…………… 1／3

石　器…………… 2／3

5. 積穴住居跡平面図の表記は以下のとおりである。

外形について、壁が残存している場合はその範囲と形状を実線にて表記した。また、壁が残存していない場合は、床面残存範囲を一点鎖線で、住居掘り方残存範囲を破線で表記した。

住居内の施設は、完掘状態における施設の上面と下面を表記した。

柱材・壁材・その他木材の痕跡・炉・焼け面・貼床の範囲は、それぞれスクリーントーンにして表現した。

6. 出土遺物の朱彩・黒色処理・2次的な粘土の貼り付けについては、それぞれスクリーントーンにて表現した。
7. 本書の執筆は佐藤洋一が行った。
8. 本発掘調査及び本書の作成にあたり、次の方々から多大なるご指導、ご協力を賜った。記して謝意を表したい（敬称略、五十音順）
相澤 清利・阿部 博志・荒井 格・伊藤 博道・加藤 道男・菊地 逸夫・後藤 秀一
齋藤 彰弘・辻 秀人・藤沢 敏・古川 一明・真山 悟・村田 覧一・渡辺 清子
9. 本発掘調査の出土遺物や記録、本書編集に関する資料は全て、蔵王町教育委員会が一括保管している。

第1章 遺跡の概要と周辺の遺跡

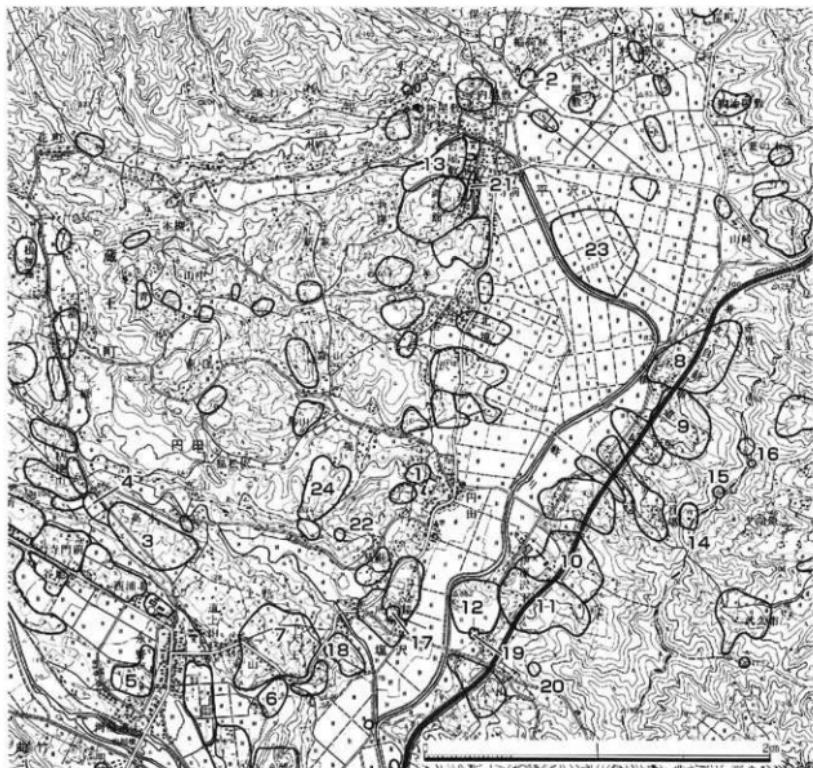
堀の内遺跡は、宮城県刈田郡蔵王町円田字堀の内・字寺坂に所在する。

遺跡の所在する蔵王町は、奥羽山脈の南部を形成する蔵王連峰の東麓に位置している。町域の西部は標高約1,700mの蔵王連峰から連なる高地、及びその麓部から連続した丘陵で、東に向かって徐々に標高を減じる。この丘陵は高木丘陵と呼ばれ、町域西部の大部分を占める。一方東部は、町域の北部から南に流れる戸川の沖積作用によって形成された、標高80mほどの低地になっている。この低地は西を高木丘陵に、北及び東を愛宕山丘陵にかこまれ、盆地状の地形となっている。この盆地は円田盆地と呼ばれている。

本遺跡は、円田盆地西縁に接続する高木丘陵の端部、標高約100mのゆるやかな北東斜面に立地している。

円田盆地周辺の丘陵端部は、旧石器代以降各時代の遺跡が数多く発見されており、この地が古くから人間の生活に好適な場所であったことがうかがえる。最も古い遺跡は盆地北西部の前戸内遺跡で、旧石器時代後期の柳葉形尖頭器が出上している。縄文時代の遺跡は高木遺跡や湯坂山B遺跡など、高木丘陵頂部に立地するものが多い。弥生時代に入ると遺跡分布の中心が丘陵頂部から丘陵端部に移り、「円田式」標式遺跡である西浦遺跡をはじめとした多くの遺跡が認められる。このことは、それまでの森林地帯における狩猟採集を中心とした生活から、低地における農耕を中心とした生活へと生活形態が変化し、それに伴って生活適地も変化したものと見えることができる。古墳時代には、県南地方の古墳時代最初期段階の集落跡である大橋遺跡や台遺跡、瀬訪館前遺跡などが盆地周縁部に数多く確認され、円田盆地を基盤とした生活圏が形成されていたことが推察される。愛宕山丘陵頂部には、愛宕遺跡、古峰神社古墳、夕向原古墳群などの前方後円墳が営まれ、高木丘陵にも宋膳堂古墳、天王古墳群など、埴輪を伴う古墳がいくつも残されている。古代以降の遺跡は都遺跡、下永向山遺跡、戸の内脇遺跡などがある。また、この地に、笛谷峠を越えて陸奥・出羽両国を結ぶ笛谷街道が整備されたのもこの時期であるとされる。中世以降、この地は戦略上の要衝地として多くの館が営まれた。当時の遺跡として、花櫛館跡、兵糧館跡など多くの館跡が発見されている（第1図）。

なお、本遺跡は1989年に町立円田幼稚園建設に先立つ事前調査が実施され、南小泉式期の堅穴住居跡1軒、7世紀後半～8世紀前葉の堅穴住居跡5軒をはじめとした遺構が発見された。1989年の調査範囲は、今回の調査区の北側に位置している。



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	堀之内遺跡	縄文～古墳・古代	13	諏訪館前遺跡	縄文～古墳・平安
2	前戸内遺跡	旧石器・縄文・古代	14	愛宕山遺跡	弥生・古墳
3	高木遺跡	縄文	15	古峯神社古墳	古墳
4	精堂山遺跡	縄文・弥生・古代	16	夕向原古墳群	古墳
5	西浦遺跡	縄文・弥生・平安	17	宋膳堂古墳	古墳
6	下水向山遺跡	縄文・弥生・平安	18	天王古墳群	古墳
7	上野遺跡	縄文・弥生・平安	19	西脇古墳	古墳
8	赤鬼上遺跡	弥生・平安・中世	20	中屋敷古墳	古墳
9	大橋遺跡	縄文～古墳・平安	21	諏訪館前横穴墓群	古墳
10	伊原沢下遺跡	古墳	22	八幡山古墳	古墳
11	塙沢北遺跡	弥生・古墳・平安	23	都遺跡	縄文～古墳・古代
12	台遺跡	弥生・古墳・平安	24	花棚館跡	中世

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 遺跡周辺の地形と調査区

第2章 調査に至る経緯と調査方法

〔調査に至る経緯〕

今回の発掘調査は、農道白山八堀線改良工事に先立つものである。

平成5年に計画された農道白山八堀線の改良工事は、堀の内遺跡として周知された地域の東部を南北に横切る形で道路改良が行われるというものであったことから、宮城県教育庁文化財保護課・蔵王町農林課・蔵王町教育委員会の3者が埋蔵文化財の保存について協議を行った。その結果、工事対象地域のうち堀の内遺跡に係る部分の地下遺構の状況を把握する必要性から、現道及び拡幅範囲を対象に遺構確認調査を実施することとした。遺構確認調査は平成7年11月、宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て蔵王町教育委員会が実施し、表土及び確認面から遺物を発見するとともに、第Ⅲ層上面で6軒の堅穴住居跡を確認した。この調査成果を基礎資料として再度保存協議を行った結果、農道の改良計画は基本計画どおりに実施すること、工事を実施する前に地下遺構について詳細な発掘調査を実施することが決定した。蔵王町教育委員会では、宮城県教育庁文化財保護課の指導協力の下、平成8年6月5日から7月5日にかけて道路拡幅部分の、また7月18日から8月23日にかけて現道部分の発掘調査を実施した。

〔調査の方法〕

調査に先立ち、基準点1及び2を設定し、2つの基準点を結ぶ線分を基準線としてグリッドを設定した。グリッドの起点 (S-O-N/E-O-W) は基準点1とした。基準点1及び2の国家座標は次の通りである。

基準点1 : X=-210704.6274/Y=-13360.8991

基準点2 : X=-210638.5502/Y=-13332.4755

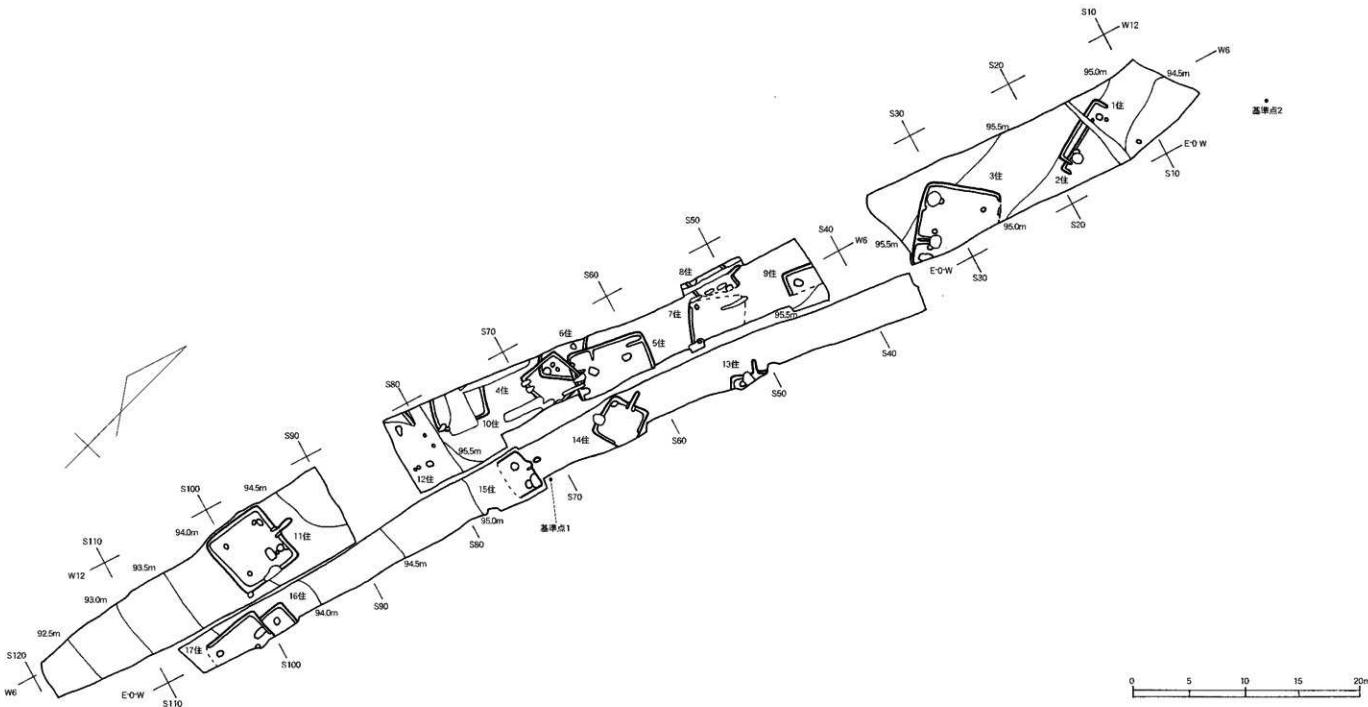
なお、基準線の方位は磁北から16.8°西に傾いている。

検出した遺構は簡易遺り方測量により1/20の平面図を作成し、必要に応じて断面図を作成した。また、35mmカラースライド及び35mm・60mmモノクロ写真による記録もあわせて行った。遺構発掘時に出土した遺物は、遺構毎に出土層位及び位置を明確にしながら取り上げた。

〔基本層位〕

調査区の基本層位は、第I層が暗褐色の表土、第II層が黒褐色の黒ボク土・第III層が黄褐

色のロームである。第Ⅰ層は調査区全域に普遍的に存在し、層の厚さもほぼ一定である。第Ⅱ層は調査区北方ではほとんど堆積が認められないが、南方に向かってその厚さを増していく。第Ⅲ層の上面は、S0～S81の範囲ではほぼ平坦だが、それより南方では徐々に落ち込み、S100以降では傾斜が急になり、S110付近から沢状の地形になる。第Ⅲ層上面の落ち込みと第Ⅱ層の層厚の増加はほぼ一致しており、地表面でも傾斜はあるものの、第Ⅲ層のそれと比較してかなり緩やかである。



第3図 遺構配置図

第3章 発見された遺構と出土遺物

今回の調査において発見された遺構は竪穴住居跡17軒で、それらの遺構の内外から、土師器、須恵器、弥生土器、続縄文土器、鉄製品、石器が出土している。

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

第1号竪穴住居跡（第4図）

【位置・確認面】 S12～21/WO～9の第Ⅲ層上面で確認。

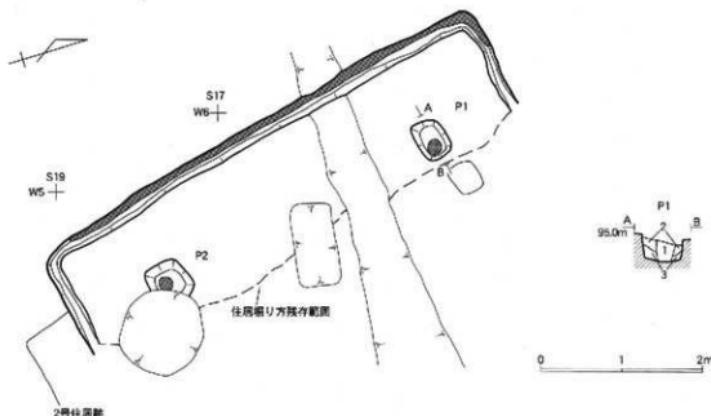
【重複】 第2号竪穴住居跡と重複し、これより新しい。

【平面形・規模】 東側の大部分が削平によって消失しており、西辺部のみが残存する。残存部から東西1.2m以上、南北6.3mの方形を基調とするものと考えられる。

【堆積上】 削平により残存しない。

【壁】 削平により残存しない。

【床】 堆積上が残存しないため床面を確定することができない。周溝に囲まれた範囲は第Ⅲ



No.	土色	土質	備考
1	10YR 3/1 黒褐色	シルト	地山ブロック・地山粒含む 柱痕跡
2	10YR 3/3 暗褐色	シルト	地山ブロック多く含む 炭化物含む 柱穴掘り方埋土
3	10YR 4/2 灰黄褐色	シルト	地山粒多く含む 柱穴掘り方埋土

第4図 第1号竪穴住居跡

層上面及び掘り方埋土（10 YR 3/1 黒褐色シルト。地山ブロックを多く含み、炭化物を若干含む）であることから、第Ⅲ層及び掘り方埋土を床としていたと考えられる。

【柱穴】住居範囲内と考えられる位置から2基のピット（P1・2）を検出した。このうち、P1は住居北西隅部付近に、P2は南西隅部付近に位置し、P1とP2を結ぶ直線は住居西辺と平行する。これらのピットの平面形は長軸約55cm×短軸40～48cmの長方形で、深さは約35cmである。いずれのピットでも直径14～18cmの円形の柱痕跡を確認した。P1及びP2は位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

【周溝】西部に残存する。幅12～26cm、深さ3～13cm。西辺部～北西隅部付近の周溝内から幅3～13cm、深さ5～11cmの埴材痕跡を確認した。

【遺物】出土していない。

第2号竪穴住居跡（第5図）

【位置・確認面】S12～21/WO～9の第Ⅲ層上面で確認。

【重複】第1号竪穴住居跡と重複し、これより古い。

【平面形・規模】東側の大部分が削平によって消失しており、西辺部の周溝のみ残存する。残存部から東西0.9m以上、南北5.2m以上の方形を基調とするものと考えられる。

【堆積土】削平により残存しない。

【壁】削平により残存しない。

【床】削平により残存しない。

【柱穴】住居範囲内と考えられる位置から2基のピット（P1・2）を検出した。

P1とP2を結ぶ直線は住居西辺と直交する。これらのピットの平面形は長軸36～40cm×短軸30～35cmの長方形で、深さはP1が38cm、P2が6cmである。いずれのピットでも直径14cmの円形の柱痕跡を確認した。P1及び2は位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

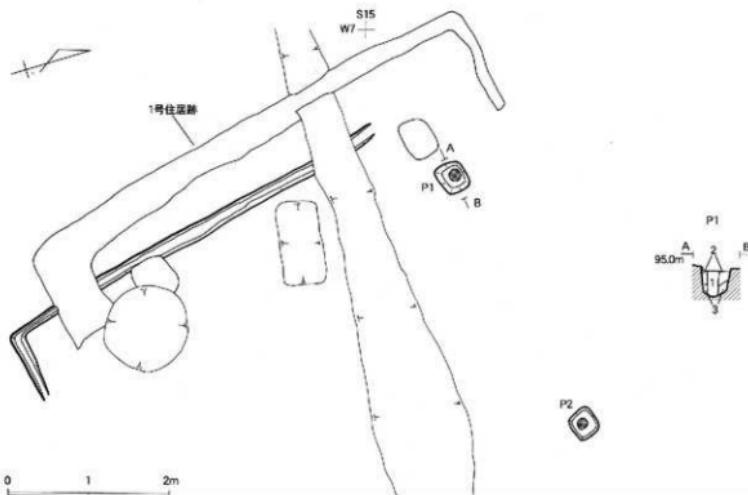
【周溝】西辺部及び南西隅部に残存する。幅8～24cm、深さ3～9cm。

【遺物】出土していない。

第3号竪穴住居跡（第6～9図）

【位置・確認面】S24～36/WO～9の第Ⅲ層上面で確認。

【平面形・規模】東側の半分程度が削平によって消失しており、西半のみが残存する。残存部から北西辺6.7m、南西辺7.2mの方形を基調とするものと考えられる。



No.	土色	土質	備考
1	2.5 YR 4/2 灰赤色	シルト	白色粘土粒多く含む 柱痕跡
2	10YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト	白色粘土ブロック・地山ブロック含む 柱穴掘り方埋土
3	10YR 5/3 にぶい黄褐色	シルト	地山粒多く含む 柱穴掘り方埋土

第5図 第2号竪穴住居跡

[堆積土] 3層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

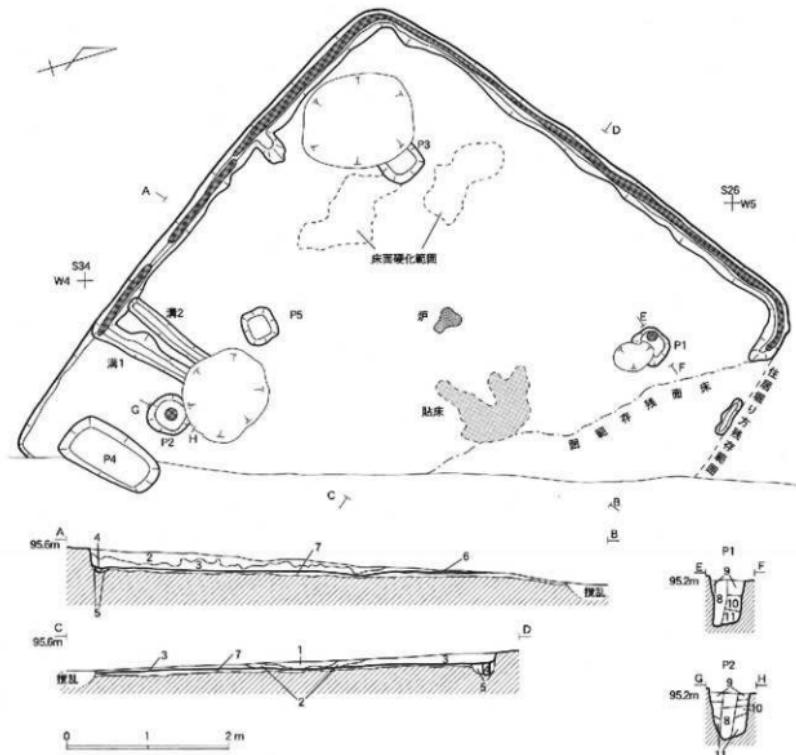
[壁] 第III層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い西隅部で34cmである。

[床] 挖り方埋土を床としており、平坦である。中央部で部分的に貼床が施されている。また、P3付近の床面が部分的に硬化している。

[炉] 住居中央部に、床面が焼けて赤変している部分を確認した。その範囲は径約30cmの不整形で、炉と考えられる。

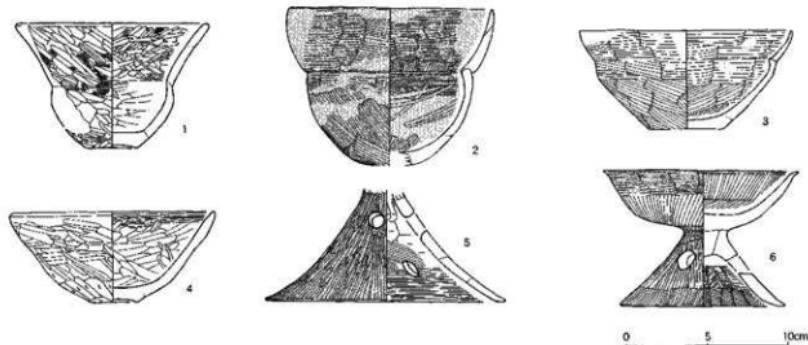
[柱穴] 住居の対角線上から3基のピット (P1~3) を検出した。これらのピットの平面形は長軸44~52cm×短軸40~50cmの長方形で、床面からの深さは55~64cmである。P1・2から直径15~18cmの円形の柱痕跡を確認した。P1~3は、位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

[周溝] 南隅部を除き残存範囲を全周する。幅16~30cm、深さ5~14cm。周溝のほぼ



No.	土色	土質	備考
1	10YR 2/2 黒褐色	シルト	地山粒含む
2	10YR 3/2 黒褐色	シルト	地山粒含む
3	10YR 3/2 黒褐色	シルト	地山小ブロック・地山粒含む
4	10YR 3/2 黒褐色	シルト	地山粒少量含む 壁材痕跡
5	10YR 2/3 黒褐色	シルト	地山粒含む 周溝埋土
6	10YR 6/6 明黄褐色	粘土	貼床
7	10YR 3/3 暗褐色	シルト	地山ブロック・炭化物多く含む 住居堀り方埋土
8	10YR 3/3 暗褐色	シルト	地山粒含む 柱痕跡
9	10YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト	地山ブロック多く含む 柱穴堀り方埋土
10	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト	地山ブロック多く含む 柱穴堀り方埋土
11	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト	柱穴堀り方埋土

第6図 第3号竪穴住居跡



No.	遺物種別	分類	層位	外表面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	深さ	図版
1	土師器	壺	A 2 貯蔵穴埋土	ヘラケズリ・ハケメ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ→ヘラミガキ	12	3.1	7.7	8-4
2	土師器	壺	A 1 貯蔵穴埋土	ヘラミガキ→朱彩	ヘラミガキ→朱彩	不明	13	—	—	8-1
3	土師器	壺	A 1 貯蔵穴埋土	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ→ヘラミガキ	13	4.6	6.1	8-2
4	土師器	壺	A 3 貯蔵穴埋土	下部ヘラケズリ→上半ヘラミガキ	ヘラミガキ→白羅ヨコナギ	ヘラケズリ	13	2.9	5.6	8-3
5	土師器	壺	台 A 貯蔵穴埋土	ヘラミガキ→朱彩	受け部:不明	底部内面:ヘラナデ	—	15	—	8-13
6	土師器	壺	貯蔵穴埋土	ヘラミガキ・朱彩	底部:ヘラミガキ	底部内面:ヘラナデ	12	10	8.4	8-14

第7図 第3号竪穴住居跡出土遺物(1)

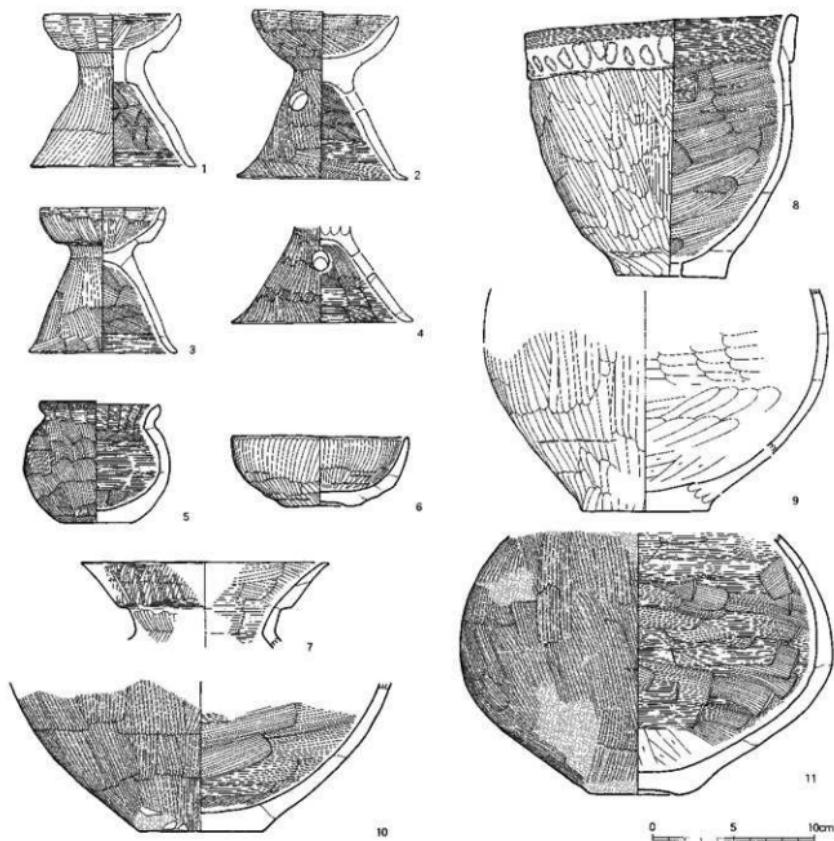
全ての範囲から幅3~12cm、深さ5~15cmの横材痕跡を確認した。

〔溝〕南西壁際の床面から、壁と直交する溝を2条確認した(溝1・2)。いずれも幅20cm、深さ10cmで、南西辺の周溝と重複する。

〔貯蔵穴〕住居南隅部から1基のピット(P4)を検出した。P4の平面形は長軸120cm×短軸66cmの長方形で、床面からの深さは90cmである。P4は、位置・形状・規模から貯蔵穴と考えられる。

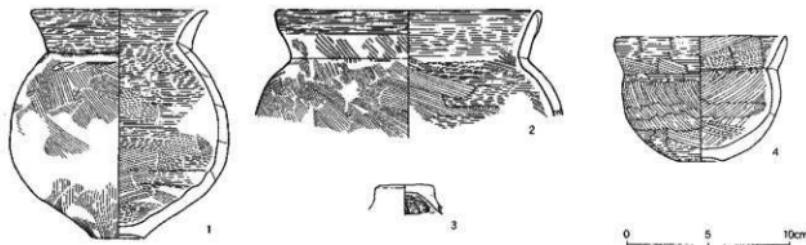
〔その他のピット〕溝2付近から1基のピット(P5)を検出した。P5の平面形は一辺40cmの方形で、床面からの深さは17cmである。

〔遺物〕床面・住居堆積土・周溝埋土・貯蔵穴埋土から土師器が、住居堆積土から須恵器が出土した。また、貯蔵穴埋土から鉄製品が出土したが、細片のため器種の確定はできず、図示することもできなかった。土師器は21点が図化できた。第7図1~6は貯蔵穴埋土から出土したものである。また、第8図7・8は貯蔵穴付近の床面から出土したものである。第8図1・2・5・6・11及び第9図1・2は炉の北西寄りの床面からまとめて出土したものである。このうち壺(第8図6)は壺(同11)の内部から、正位の入れ子状になって出土した。その他、堆積土から蓋?(第9図3)が出土した。



No.	器種別	分類	所位	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	高さ	回版
1	土師器	器台B	床	ハラミガキ	受け型・ハラミガキ	留め内面・ハラナデ	8.5	10.2	9.5	8-7
2	上師器	器台B	床	ハラミガキ・朱彩	受け型・ハラミガキ・朱彩	留め内面・ハラナデ	9	10.8	10.4	8-6
3	上師器	器台B	床	ハラミガキ	受け型・ハラミガキ	留め内面・ハラナデ	7.3	9.2	9.1	8-11
4	土師器	器台B	床	ハラミガキ・朱彩	受け型・不明	留め内面・ハラナデ	-	11.2	-	8-10
5	土師器	壺B1	床	ハラミガキ	底凹ナデ・口縁・ハラミガキ	ハラケズリ	7.5	4.5	7.4	8-17
6	土師器	壺	床	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラケズリ・ハラミガキ	11.1	3.2	4.5	8-9
7	上師器	壺A	床	ハラミガキ	ハラミガキ	不明	15.3	-	-	
8	土師器	壺	床	ハラミガキ・山根ユビオサエ	底凹ナデ・口縁ヨコナデ	ハラケズリ・孔径1.3cm	17	6.9	16.4	8-19
9	土師器	壺A	床	ハラミガキ	ハラミガキ	不明	-	8	-	8-12
10	土師器	壺A	床	ハラミガキ・朱彩	留め内面	ハラケズリ	-	7.8	-	8-15
11	土師器	壺A	床	ハラミガキ・朱彩	ハラナデ	ハラケズリ	-	5	-	8-18

第8図 第3号竪穴住居跡出土遺物 (2)



第9図 第3号竪穴住居跡出土遺物 (3)

第4号竪穴住居跡 (第10図)

【位置・確認面】 S 63~72/W3~12の第III層上面で確認。

【重複】 第5号・6号竪穴住居跡と重複し、これらの中で最も新しい。

【平面形・規模】 1辺3.9mの不整な方形である。

【堆積上】 3層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

【壁】 第III層及び第5・6号竪穴住居跡の堆積土を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い西辺部で9cmである。

【床】 第III層及び第5・6号竪穴住居跡の堆積土を床としており、平坦である。

【柱穴】 検出されなかった。

【周溝】 全周する。幅16~30cm、深さ4~9cm。

【遺物】 住居堆積土から土師器・須恵器・石製模造品(第10図3)が出土した。土師器は壺(第10図1)及び壺(同2)の2点が図化できた。

第5号竪穴住居跡 (第11・12図)

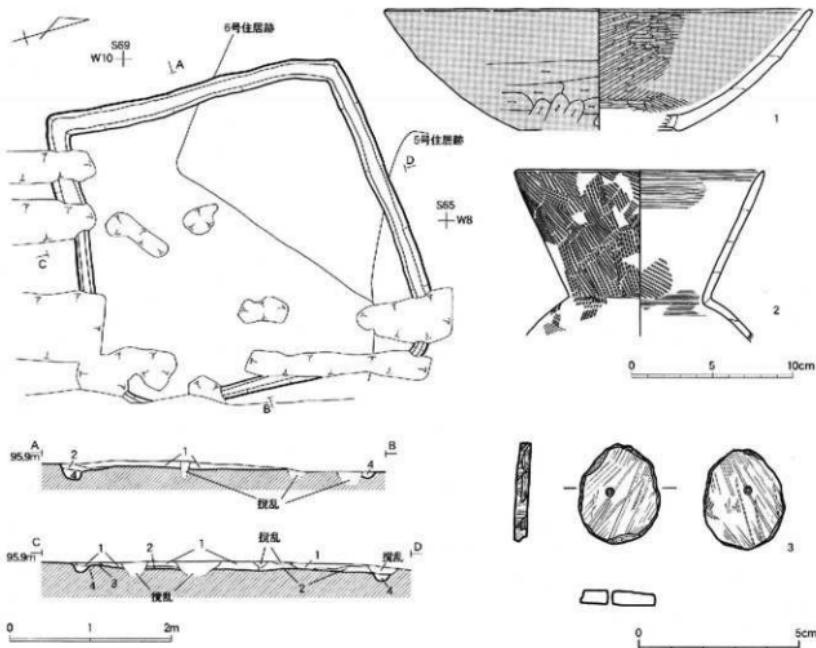
【位置・確認面】 S 57~66/W3~12の第III層上面で確認。

【重複】 第4・6号竪穴住居跡と重複し、第4号竪穴住居跡より古く、第6号竪穴住居跡より新しい。

【平面形・規模】 東部が削平によって消失しており、西部のみが残存する。残存部から東西4.2m以上、南北7.2mの方形を基調とするものと考えられる。

【堆積上】 3層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

【壁】 第III層及び第6号竪穴住居跡の堆積土を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存



No.	土色	土質	備考
1	10YR 3/2 黒褐色	シルト	炭化材・炭化物・焼土ブロック多く含む
2	10YR 3/1 黒褐色	シルト	炭化物・地山小ブロック・地山粒含む
3	10YR 3/1 黒褐色	シルト	焼土多く含む 炭化物・地山小ブロック・地山粒含む
4	10YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト	地山土多く含む 周溝埋土

No.	器種別	層位	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	高さ	図版
1	土師器環	堆積土	ヘラケツリ→ヘラナテ・朱彩	ヘラミガキ→朱彩	不明	26.4	9.8	7.5	9-2
2	土師器蓋	確認面	ハケメ	ハケメ→ヘラナテ→口縁ヨコナテ	不明	15.5	—	—	9-1

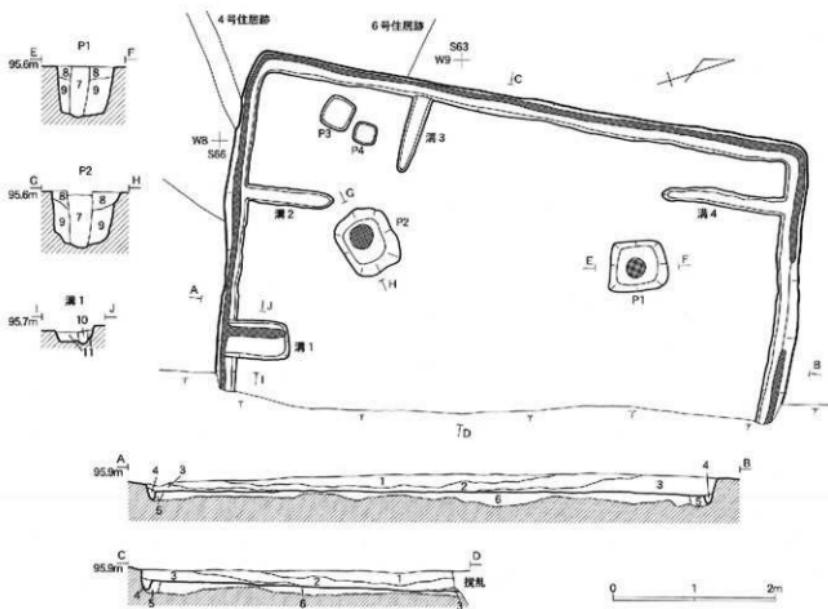
No.	器種別	層位	材質	全長	全幅	厚さ	備考	図版
3	石製模造品	堆積土	粘板岩	3.1	2.5	0.4	円盤状 孔径3mm 表面・側面に擦過痕	11-15

第10図 第4号竪穴住居跡と出土遺物

壁高は、最も残存状態の良い西辺部で22cmである。

[床] 掘り方理土を床としており、平坦である。

[柱穴] 住居の対角線上から2基のピット(P1・2)を検出した。これらのピットの平面形は長軸70~82cm×短軸60~68cmの長方形で、床面からの深さは62~70cmで



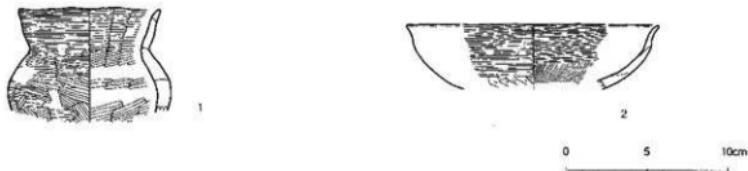
No.	土色	土質	備考
1	10YR 3 / 1 黒褐色	シルト	炭化物多く含む
2	10YR 3 / 2 暗褐色	シルト	地山小ブロック・地山粒含む 炭化物多く含む
3	10YR 3 / 3 黒褐色	シルト	地山小ブロック・地山粒少量含む 炭化物含む
4	10YR 4 / 2 灰黄褐色	シルト	地山ブロック含む 壁材痕跡
5	10YR 4 / 4 褐色	シルト	地山ブロック多く含む 周溝埋土
6	10YR 3 / 4 暗褐色	シルト	地山ブロック多く含む 住居堀り方埋土
7	10YR 3 / 2 暗褐色	シルト	地山ブロック・黒色土含む 柱痕跡
8	10YR 5 / 6 黄褐色	シルト	地山ブロック多く含む 柱穴堀り方埋土
9	10YR 5 / 4 にぶい黄褐色	シルト	地山ブロック多く含む 柱孔堀り方埋土
10	10YR 3 / 3 暗褐色	シルト	地山土含む 材の痕跡
11	10YR 3 / 4 暗褐色	シルト	地山小ブロック・地山粒含む 溝理土

第11図 第5号竪穴住居跡

ある。いずれのピットでも直径22~30cmの円形の柱痕跡を確認した。P1・2は、位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

【周溝】残存範囲を全周する。幅20~30cm、深さ3~9cm。北辺の一部を除いた周溝の全範囲から、幅5~12cm、深さ8~12cmの、壁材痕跡を確認した。

【溝】壁際の床面から、壁と直交する溝を4条確認した(溝1~4)。それぞれ周溝と重複する。溝1は全長86cm、幅42cm、床面からの深さ20cmで、住居南壁際に位置する。溝内



No.	器種別	分類	層位	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	壁高	器版
1	土師器壺	壺B1	床	底部ヘラミガキ 11層ヨコナメ	ヘラミガキ	不明	8.8	—	—	
2	土師器壺		堆積土	ヘラケズリーナテ	ナテ	不明	15.6	—	—	

第12図 第5号竪穴住居跡出土遺物

に幅12cm、深さ16cmの帯状の黒褐色土を確認した。この黒褐色土は周溝の壁材痕跡と重複する。溝2～4は全長96～150cm、幅20cm、床面からの深さ10cmである。溝2及び3は住居南西隅部付近に、溝4は北西隅部付近に位置する。

【珪藻土塊】住居南西隅部の床面に、平面形40cm×30cm、重量約3kgの珪藻土塊が置かれていた。珪藻土塊には土師器壺の破片（後述）が混入していた。

【遺物】床面・住居堆積土・珪藻土塊から土師器が出土した。このうち床面及び珪藻土塊出土の壺（第12図1）と、住居堆積土出土の壺（同2）の2点が図化できた

第6号竪穴住居跡（第13・14図）

【位置・確認面】S63～69/W6～12の第III層上面で確認。

【重複】第4・5号竪穴住居跡と重複し、これらの中で最も古い。

【平面形・規模】北東隅部が第5号竪穴住居跡によって破壊されており、また、西部が調査範囲外に及んでいるため全体形は不明だが、現状から一辺約4.2mの方形を基調とするものと考えられる。

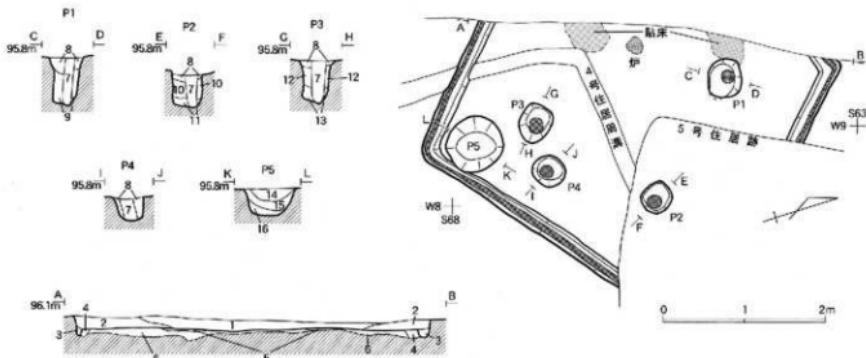
【堆積土】2層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

【壁】第III層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い北辺部で11cmである。

【床】掘り方理土を床としており、平坦である。西側に部分的な貼床が施されている。

【炉】住居中央部西寄りに、床面が焼けて赤変している部分が検出された。その範囲は径20cmの不整円形で、炉と考えられる。

【柱穴】住居の対角線上から3基のピット（P1～3）を検出した。これらのピットの平面形は長軸38～49cm×短軸35～42cmの不整長方形で、床面からの深さは46～62cm



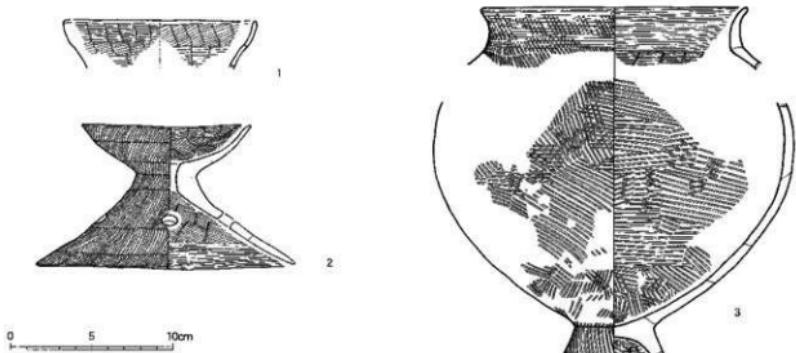
No.	土色	土質	備考
1	10YR 2/2 黒褐色	シルト	地山粒含む
2	10YR 3/4 暗褐色	シルト	地山小ブロック・地山粒含む 炭化物多く含む
3	10YR 4/2 灰黄褐色	シルト	地山小ブロック・地山粒少量含む 壁材痕跡
4	10YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト	地山ブロック含む 壁材痕跡
5	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘土	貼床
6	10YR 4/2 灰黄褐色	シルト	地山ブロック多く含む 住居掘り方埋土
7	10YR 3/3 暗褐色	シルト	地山ブロック・地山土含む 柱痕跡
8	10YR 4/4 褐色	シルト	地山ブロック・黒色土ブロック含む 柱穴掘り方埋土
9	10YR 3/4 暗褐色	シルト	地山ブロック多く含む 柱穴掘り方埋土
10	10YR 3/2 黒褐色	シルト	地山ブロック多く含む 柱穴掘り方埋土
11	10YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト	柱穴掘り方埋土
12	10YR 4/2 灰黄褐色	シルト	地山粒少量含む 柱穴掘り方埋土
13	10YR 4/4 褐色	シルト	柱穴掘り方埋土
14	10YR 2/2 黒褐色	シルト	地山粒少量含む P5埋土
15	10YR 3/3 暗褐色	シルト	地山小ブロック含む P5埋土
16	10YR 3/4 暗褐色	シルト	地山ブロック含む P5埋土

第13図 第6号竖穴住居跡

である。いずれのピットでも直径12~18cmの円形の柱痕跡を確認した。P1~3は、位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。また、東壁際の床面から1基のピット(P4)を検出した。P4の平面形は一辺36cmの隅丸方形で、床面からの深さは30cmである。このピットから、壁に向かって傾斜した径約15cmの円形の柱痕跡を確認した。

【周溝】残存範囲を全周する。幅18~22cm、深さ8~10cm。周溝の全範囲から、幅4~8cm、深さ5~9cmの、壁材痕跡を確認した。

【貯蔵穴】住居南隅部から1基のピット(P5)を検出した。P5の平面形は径70cmの不整円形で床面からの深さは34cmである。P5は位置・形状・規模から貯蔵穴と考えられる。



No.	器種別	分類	層位	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	高さ	回数
1	上脚壺	壺A1	貯藏穴埋土	ヘラミガキ	ヘラミガキ	不明	11.8	—	—	
2	上脚器臺	器台A	貯藏穴埋土	ヘラミガキ→朱彩	受け器・ヘラミガキ→朱彩	裏面内面・ヘラニア	10.1	16	8.7	9-3
3	土脚器台付甕	P2埋土	ハケメ→口縁ヨコナデ	ハケメ→口縁ヨコナデ	合内面・ハケメ	16.8	—	—	9-4	

第14図 第6号豎穴住居跡出土遺物

【遺物】住居堆積土・P2埋土・貯藏穴底面・貯藏穴埋土から土師器が出土し、このうち3点が図化できた。第14図1は貯藏穴埋土から出土した壺である。同2は貯藏穴底面から出土した器台、同3はP2埋土及び住居堆積土から出土した台付甕である。

第7号豎穴住居跡（第15図）

【位置・確認面】S 48～57/W3～9の第III層上面で確認。

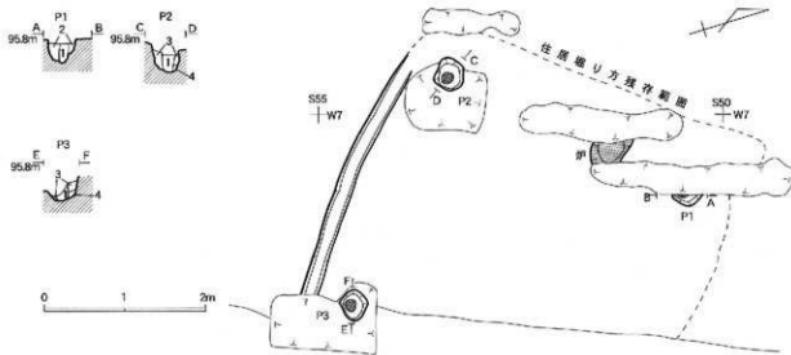
【平面形・規模】北側の大部分が削平によって消失しており、また、東部が調査範囲外に及んでいるため全体形は不明だが、残存部から東西3.8m以上、南北4.7mの方形を基調とするものと考えられる。

【堆積土】削平により残存しない。

【壁】削平により残存しない。

【床】堆積土が残存しないため床面を確定することができない。住居範囲と考えられる部分では掘り方埋土（1OYR3/1 黒褐色シルト。地山ブロックを多く含み、炭化物を若干含む）が残存していることから、少なくとも部分的には掘り方埋土を床としていたと考えられる。

【炉】住居範囲内と考えられる位置から径約50cm、深さ約10cmの不整梢円形のピットが検出された。このピットの埋土は焼土（2.5YR4/6 赤褐色シルト）で、炉と考えられる。



No.	土色	土質	備考
1	10YR 3/3 暗褐色	シルト	地山ブロック含む 柱痕跡
2	10YR 3/2 黒褐色	シルト	地山ブロック・地山粒多く含む 柱穴掘り方埋土
3	10YR 3/4 暗褐色	シルト	地山ブロック含む 柱穴掘り方埋土
4	10YR 4/6 褐色	シルト	地山ブロック多く含む 柱穴掘り方埋土

第15図 第7号竪穴住居跡

【柱穴】住居範囲内と考えられる位置から3基のピット（P1～3）を検出した。このうちP2とP3の中心を結ぶ直線は住居南辺に平行で、P1とP2の中心を結ぶ直線は住居南辺に直交する。これらのピットの平面形は一辺34～40cmの不整形で、床面からの深さは28～38cmである。いずれのピットでも直径10～16cmの円形の柱痕跡を確認した。P1～3は、位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

【周溝】南辺部に残存する。幅約20cm、深さ6～11cm。

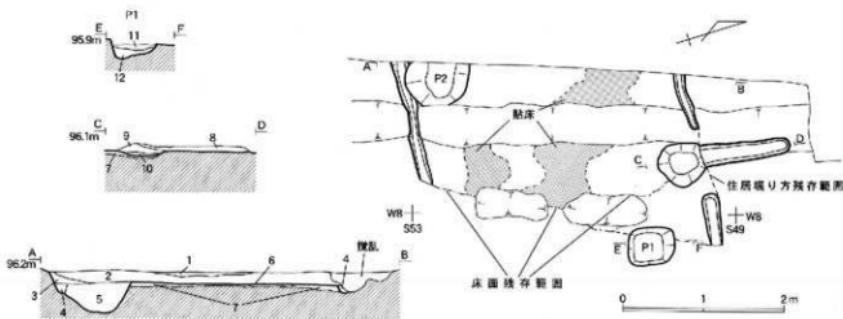
【遺物】炉ピットの埋土から土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。

第8号竪穴住居跡（第16図）

【位置・確認面】S48～54/W6～12の第Ⅲ層上面で確認。

【平面形・規模】東側が削平により消失しており、また、西側が調査範囲外に及んでいるため全体形は不明だが、残存部から東西2.1m以上、南北3.5mの方形を基調とするものと考えられる。

【堆積土】3層に分けられる。いずれも自然堆積土である。



No.	土色	土質	備考
1	10YR 2 / 1 黒	シルト	
2	10YR 3 / 1 黒褐色	シルト	地山小ブロック・地山粒多く含む
3	10YR 3 / 2 黒褐色	シルト	地山小ブロック含む
4	10YR 4 / 1 褐灰色	シルト	地山ブロック多く含む 周溝堆積土
5	10YR 4 / 2 灰黄褐色	シルト	地山ブロック多く含む P2埋土
6	10YR 4 / 4 褐色	シルト	粘床
7	10YR 4 / 3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック多く含む 住居堀り方埋土
8	5YR 2 / 3 極暗赤褐色	シルト	焼土・炭化物多く含む カマド・煙道内堆積土
9	5YR 3 / 4 暗赤褐色	シルト	焼土・炭化物多く含む カマド内堆積土
10	2.5YR 4 / 4 にぶい赤褐色	シルト	焼土ブロック多く含む カマド内堆積土
11	10YR 4 / 1 褐灰色	シルト	地山粒含む
12	10YR 3 / 4 噴褐色	シルト	地山小ブロック含む

第16図 第8号豊穴住居跡

【壁】第III層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い南辺部で15cmである。

【床】掘り方埋土を床としており、ほぼ平坦である。中央部に部分的な粘床が施されている。

【カマド】北壁に設置されており、燃焼部と煙道が確認された。燃焼部の底面は床面を浅く掘りくぼめて形成されており、幅5.6cm、奥行5.6cm、床面からの深さ6cmである。煙道は先端部が削平によって失われており、残存する部分は軸長10.8cm、基部幅2.9cm、基部深さ4cmで、底面はほぼ水平である。カマド側壁は確認されなかった。

【柱穴】北東部の床面から1基のピット（P1）を検出した。P1の平面形は長軸5.5cm×短軸4.7cmの長方形で、床面からの深さは25cmである。P1は、位置・形状・規模から支柱穴と考えられる。

【周溝】南部及び北部に残存する。幅1.4～2.0cm、深さ4～9cm。

【貯蔵穴】住居南壁際から1基のピット（P2）を検出した。ピット西部が調査区外に及んでおり全体形は不明だが、平面形は径7.8cmの不整円形を基調とするものと考えられ、床面

からの深さは30cmである。P2は、位置・形状・規模から貯蔵穴と考えられる。

【遺物】住居堆積土から土師器・須恵器が出土した。また、カマド燃焼部底面から土師器が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

第9号竪穴住居跡（第17図）

【位置・確認面】S42～48/W3～9の第III層上面で確認。

【平面形・規模】東側が削平により消失しており、また、北側が調査範囲外に及んでいるため全体形は不明だが、残存部から東西2.1m以上、南北2.8m以上の方形を基調とするものと考えられる。

【堆積土】削平により残存しない。

【壁】削平により残存しない。

【床】堆積土が残存しないため床面を確定することができない。周溝に囲まれた範囲は掘り方埋土（10YR 4/3にぶい黄褐色シルト。地山ブロック多量に含む）であることから、少なくとも部分的には掘り方埋土を床としていたとも考えられる。

【柱穴】住居南西隅部から1基のピット（P1）を検出した。P1の平面形は長軸84cm×短軸58cmの長方形で、床面からの深さは42cmである。このピットから直径22cmの円形の柱痕跡を確認した。P1は、

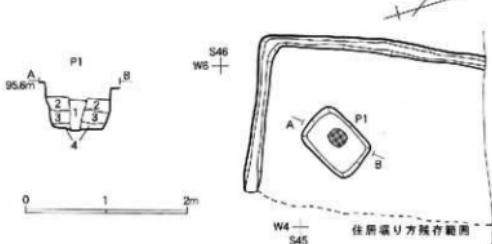
位置・形状・規模から主柱穴と

考えられる。

【周溝】南部及び西部に残存する。

幅14～20cm、深さ6～9cm。

【遺物】確認面から土師器が出土したが、細片のため図化できなかった



No.	土色	土質	備考
1	10YR 3/1 黒褐色	シルト	炭化物・地山小ブロック含む 柱痕跡
2	10YR 4/6 褐色	シルト	地山ブロック多く含む 柱穴堀り方埋土
3	2.5Y 4/4 オリーブ褐色	砂質シルト	地山ブロック多く含む グライ化 柱穴堀り方埋土
4	10YR 5/6 黄褐色	シルト	地山小ブロック多く含む 柱穴堀り方埋土

第17図 第9号竪穴住居跡

第10号竪穴住居跡（第18図）

【位置・確認面】S72～81/W6～12の第III層上面で確認。

【重複】第12号竪穴住居跡と重複し、これより古い。

【平面形・規模】東辺が搅乱により破壊されており、また、西側が調査範囲外に及んでいるため全体形は不明だが、残存部から東西3.2m以上、南北4.7mの方形を基調とするものと考えられる。

【堆積土】4層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

【壁】第III層を壁としており、

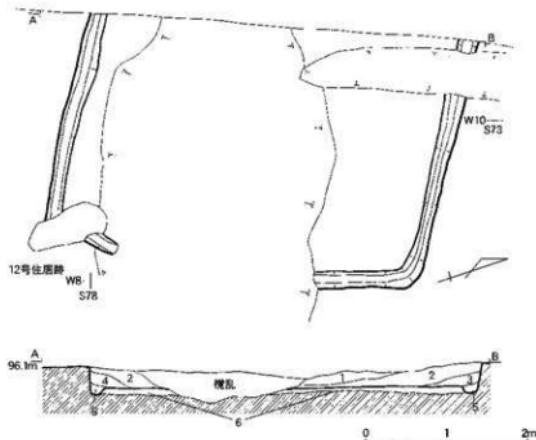
ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い南辺部で20cmである。

【床】掘り方埋土を床としており、平坦である。

【柱穴】検出されなかった。

【周溝】搅乱により東辺が一部破壊されているが、全周すると考えられる。幅1.4~20cm、深さ8~12cm。

【遺物】出土していない。



No.	上色	土質	備考
1	10YR 2/1 黒	シルト	地山粒含む
2	10YR 3/2 黒褐色	シルト	地山小ブロック含む
3	10YR 3/3 暗褐色	シルト	地山小ブロック含む
4	10YR 3/4 暗褐色	シルト	地山小ブロック・炭化物・焼土含む
5	10YR 4/4 褐色	シルト	地山ブロック多く含む 周溝埋土
6	10YR 4/6 褐色	シルト	地山ブロック多く含む 住居掘り方埋土

第18図 第10号竪穴住居跡

第11号竪穴住居跡（第19~22図）

【位置・確認面】S 93~102/W3~12の第III層上面で確認。

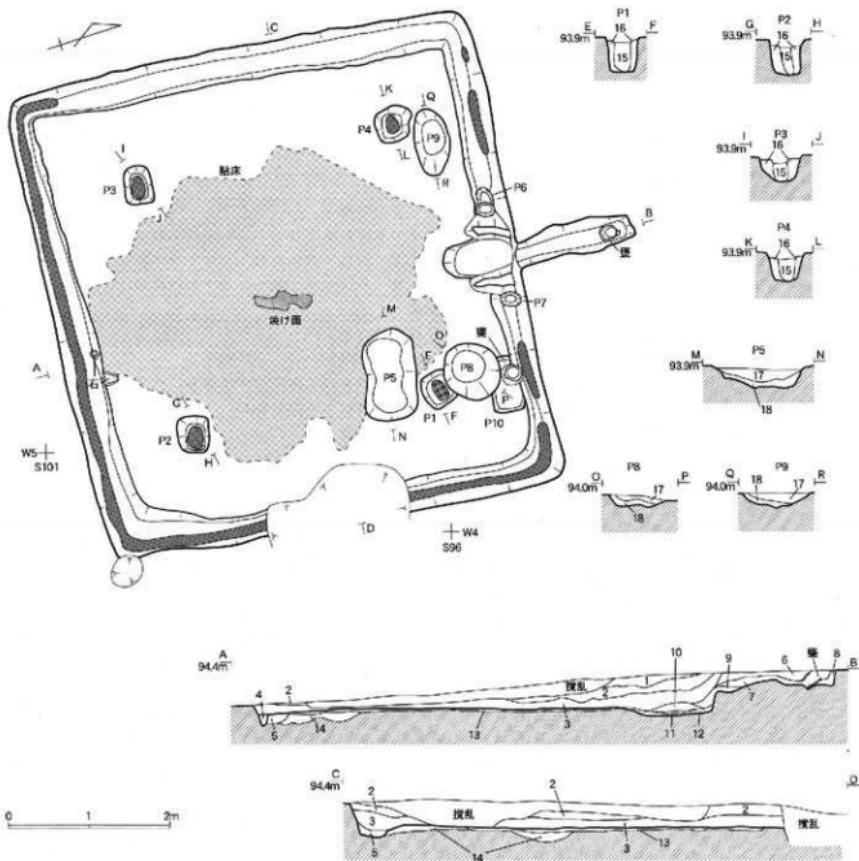
【平面形・規模】東西6m、南北5.8mの方形である。

【堆積土】3層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

【壁】第III層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い北辺部で50cmである。

【床】掘り方埋土を床としており平坦である。住居中央部は広範囲に貼床が施されている。

【カマド】住居北壁に設置されており、燃焼部及び煙道が確認された。燃焼部の底面は床面



第19図 第11号竪穴住居跡

を浅く掘りくぼめて形成されており、幅42cm、奥行88cm、床面からの深さ8cmである。燃焼部底面の左右に、灰白色粘土で側壁が形成されている。側壁は長さ約54cm、高さは左23cm・右36cmが残存している。煙道は軸長152cm、基部幅34cm、基部深さ27cmで、底面は基部からゆるやかな上り傾斜となるが、煙道中程でやや急に落ち込み、それより先はほぼ平坦である。煙道先端部から土師器甕（第20図7）が出土した。この甕は底部を欠き、逆位で据えられていた。煙出しに用いられたと考えられる。

No.	上色	土質	備考
1	7.5YR 2/2 黒褐色	シルト	
2	7.5YR 3/3 暗褐色	シルト	地山小ブロック含む
3	7.5YR 2/2 黒褐色	シルト	燒土・木炭含む
4	7.5YR 3/2 黑褐色	シルト	壁材痕跡
5	10YR 2/3 黑褐色	シルト	地山粒少量含む 周溝埋土
6	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト	灰白色粘土粒含む 煙道崩落土?
7	7.5YR 3/3 暗褐色	シルト	煙道堆積土
8	7.5YR 4/4 褐色	シルト	煙道堆積土
9	5YR 3/2 暗赤褐色	シルト	カマド内堆積土
10	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト	燒土・木炭粒多く含む カマド内堆積土
11	7.5YR 3/3 暗褐色	シルト	焼土多く含む・木炭含む カマド内堆積土
12	7.5YR 2/1 黒	シルト	燒土粒・木炭粒多く含む カマド内堆積土
13	10YR 3/4 暗褐色	シルト	貼床
14	10YR 4/6 褐色	シルト	住居堀り方埋土
15	10YR 2/1 黒	シルト	地山粒・木炭粒含む 柱痕跡
16	10YR 3/2 黑褐色	シルト	地山大ブロック・木炭粒少量含む 柱穴堀り方埋土
17	10YR 3/2 黑褐色	シルト	白色粘土含む・木炭粒含む
18	10YR 5/6 黄褐色	シルト	黒褐色土含む

(第19図の土層一覧表)

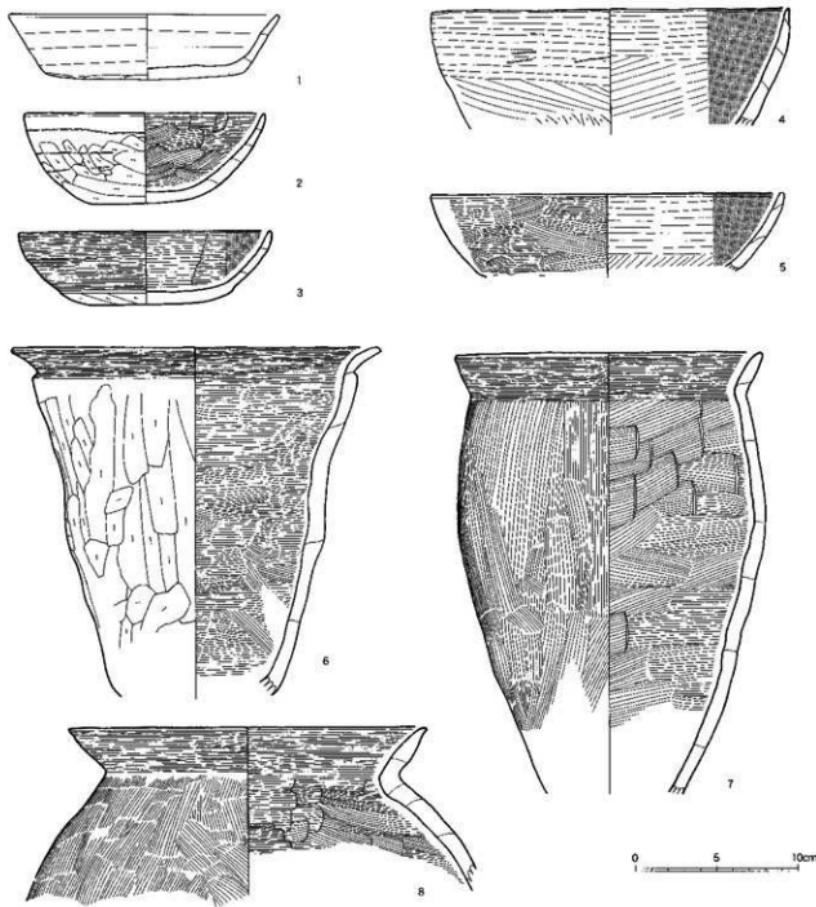
【焼け面】住居中央部に床面が焼けて赤変している部分を検出した。その範囲は72cm×24cmの不整長梢円形である。

【柱穴】住居の対角線上から4基のピット(P1~4)を検出した。これらのピットの平面形は長軸42~48cm×短軸34~42cmの長方形で、床面からの深さは37~46cmである。いずれのピットからも長径21~27cm、短径15~19cmの梢円形の柱痕跡を確認した。P1~4は、位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。

【周溝】カマド部を除き周溝する。幅26~50cm、深さ5~19cm。西辺を除く周溝のはば全ての範囲から、幅6~14cm、深さ6~14cmの壁材痕跡を確認した。

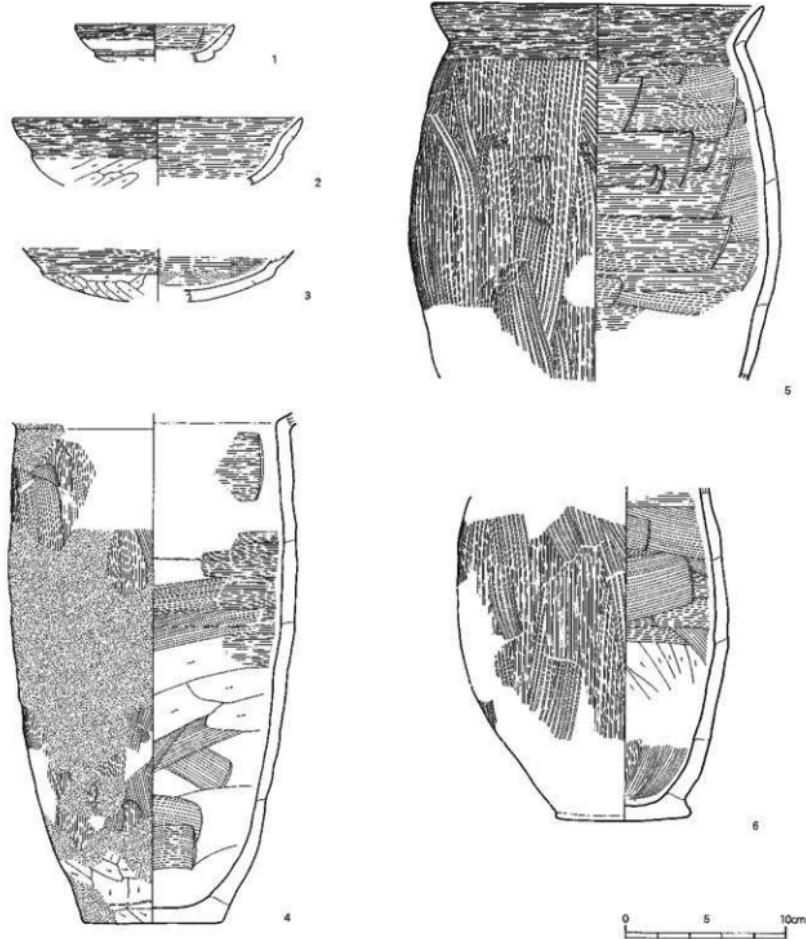
【貯蔵穴】カマド右側の北壁際から1基のピット(P8)を検出した。P8の平面形は径約75cmの円形で、床面からの深さは13cmである。また、カマド左側の北壁際から1基のピット(P9)を検出した。P9の平面形は長径81cm×短径45cmの梢円形で、床面からの深さは14cmである。P8及びP9は、位置・形状・規模から貯蔵穴と考えられる。

【その他のピット】周溝内で2基のピット(P6・7)を検出した。P6は左カマド側壁の脇に位置し、平面形は径22cmの円形で周溝底面からの深さは20cmである。P7は右カマド側壁の脇に位置し、平面形は長径25cm×短径18cmの梢円形で、周溝底面からの深さは10cmである。P6・7は、その位置からカマドに関係する構造物の痕跡であると考えられる。



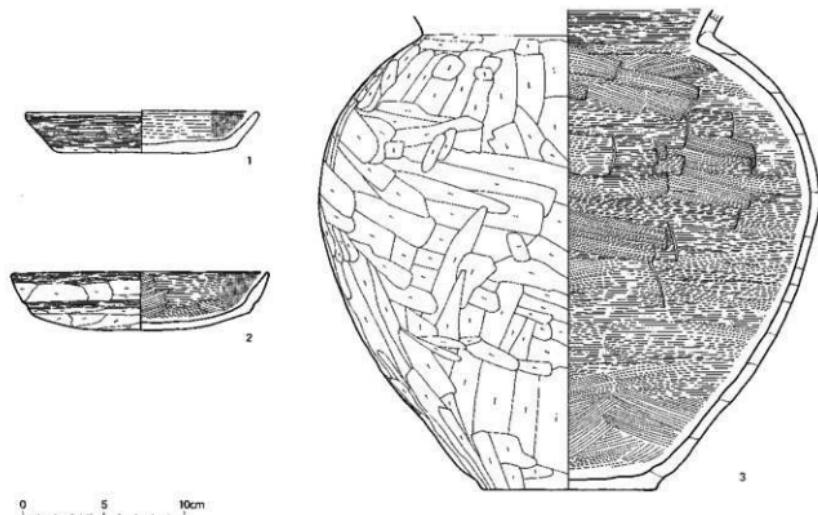
No.	器種別	分類	層位	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	高さ	回版
1	須恵器環		床	ロクロナテ	ロクロナテ	丁持ハラケズリ	16.9	12.4	4	9-9
2	土師器環		床	ヘラケズリ・ナテ	ヘラナテ		15	—	5.7	9-7
3	土師器環	环B2a	カマド側壁	ヨコナテ	ヘラミガキ→墨色処理	ヘラケズリ	15.7	—	4.5	9-5
4	土師器鉢	环B1	床・床直	下部ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	不明	22.3	—	—	9-8
5	土師器鉢		カマド側壁	ヘラナテ→下部ヘラケズリ	ヘラミガキ→墨色処理	不明	21.9	—	—	9-11
6	土師器甕		床・床直	体部ヘラケズリ 口縁ヨコナテ	ヘラナテ	不明	23.1	—	—	9-13
7	土師器甕	甕B2	煙道ビット	体部ヘラケズリ 口縁ヨコナテ	ヘラナテ	不明	19	—	—	9-14
8	土師器甕	甕B1	P10	体部ヘラケズリ 口縁ヨコナテ	口縁ヨコナテ	体部ヘラナテ 口縁ヨコナテ	22.3	—	—	10-3

第20図 第11号竪穴住居跡出土遺物 (1)



No.	器種別	分類	層位	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	高	囲版
1	土師壺坏	壺B1	カマド内堆積土	ヨコナテ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	9.9	—	—	
2	上師壺坏		堆積土上	ヨコナテ	ヨコナテ	ヘラケズリ	14.1	—	—	
3	土師壺坏		堆積土上	ヨコナテ	ヘラミガキ→黒色處理	ヘラケズリ	—	—	—	
4	土師器甕		床～堆積土	下部ヘラケズリ→一体型ヘラナテ	ヘラナテ→ヘラケズリ	ヘラケズリ	—	8.3	—	9-16
5	土師器甕	甕B1	床～堆積土	全体ヘラケズリ→口部ヨコナテ	体部ヘラナテ→口部ヨコナテ	不明	20.5	—	—	9-12
6	土師器甕	甕B1	床～堆積土	ハケメ	ヘラケズリ→ヘラナテ	ヘラケズリ	—	8	—	10-1

第21図 第11号竪穴住居跡出土遺物(2)



第22図 第11号竪穴住居跡出土遺物(3)

住居中央やや北東隅よりの位置から1基のピット(P5)を検出した。P5の平面形は長軸108cm×短軸72cmの不整長方形で、床面からの深さは30cmである。

住居北壁際から1基のピット(P10)を検出した。P10の平面形は長軸69cm×短軸39cmの長方形で、床面からの深さは24cmである。P10には土師器甕の上半部(第20図8)が正位で据えられている。

【遺物】床面・住居堆積土・カマド側壁内部・カマド内堆積土から土師器及び須恵器が、住居堆積土から須恵器が出土した。このうち土師器17点、須恵器1点が図化できた。同8は住居北壁際に正位で据えられていた土師器甕である。同6は底部が破損しているので確実なことは言えないが、その形状から甕の可能性がある。また、住居床面直上及び堆積土から縄文土器が、堆積土から不定形石器が出土したが、これらについては「その他の出土遺物」の項にて取り扱う。

第12号竪穴住居跡（第23図）

【位置・確認面】 S 75～84／W3～12の第Ⅲ層上面で確認。

【重複】 第10号竪穴住居跡と重複し、これより新しい。

【平面形・規模】 北西部を除いて削半により消失しており、また、西・南側が調査範囲外に及んでいるため全体形は不明だが、残存部から東西5.6m以上、南北2.1m以上の方形を基調とするものと考えられる。

【堆積土】 3層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

【壁】 第Ⅲ層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い西辺部で5cmである。

【床】 掘り方埋土を床としている。

【カマド】 住居北壁に設置されており、煙道の一部及び煙出しピットが確認された。煙道は残存する範囲の軸長104cm、最大幅40cm、深さ14cmで、底面は煙出しピット付近で段がつき、高くなる。煙出しピットの平面形は軸径56cm×横断径50cmの梢円形で、深さは34cmである。

【柱穴】 住居北壁近くから2基のピット（P1・2）を検出した。これらのピットの平面形は、P1が1辺40cm、P2が1辺55cmの方形で、深さは約60cmである。いずれのピットからも径12～20cm、円形の柱痕跡を確認した。P1・2は、位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。また、これらのピットは作り替えが行われており、それぞれの旧ピットから柱痕跡及び抜き取り痕を確認した。

【周溝】 住居北部及び西部に残存する。幅10～19cm、深さ1～8cm。

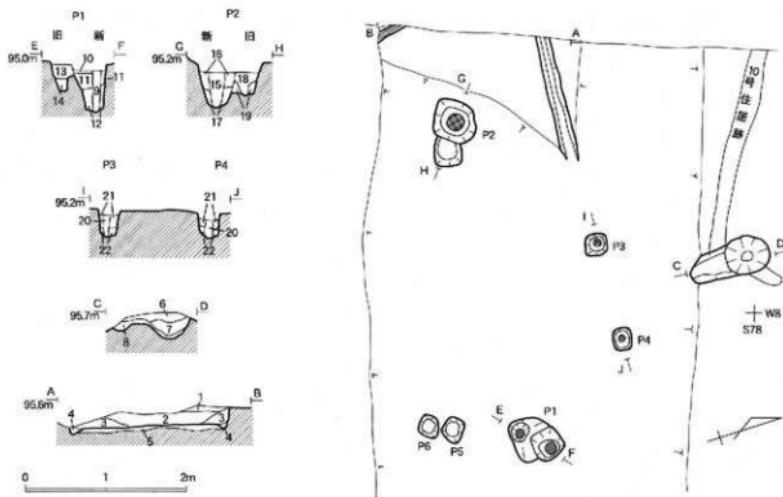
【その他のピット】 北辺の延長線上から2基のピット（P3・4）を検出した。これらのピットの平面形は一辺27cmの方形で、深さは35cmである。いずれのピットからも径8cmの円形の柱痕跡を確認した。これらのピットは本来カマド側壁があったと考えられる場所に位置しており、カマドに関係する構造物の痕跡であると考えられる。P1の南側から2基のピット（P5・6）を検出した。これらのピットの平面形は1辺28cmの方形で、深さは18cmである。

【遺物】 煙出しピット埋土から土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。

第13号竪穴住居跡（第24図）

【位置・確認面】 S 44～57／E 3～W3の第Ⅲ層上面で確認。

【平面形・規模】 西辺を除いて搅乱により破壊されているため全体形は不明だが、残存部から東西1m以上、南北3.4m以上の方形を基調とするものと考えられる。



No.	土色	土質	備考
1	10YR 2/2 黒褐色	シルト	地山小ブロック含む
2	10YR 3/1 黒褐色	シルト	地山小ブロック含む
3	10YR 3/2 黒褐色	シルト	地山小ブロック含む
4	10YR 4/2 灰黄褐色	シルト	周溝埋土
5	10YR 4/3 ぶい黄褐色	シルト	住居掘り方埋土
6	7.5YR 3/3 暗褐色	シルト	焼土・木炭粒多く含む 煙道堆積土
7	10YR 2/2 黒褐色	シルト	白色粘土含む・炭化物含む 煙道堆積土
8	7.5YR 4/3 褐色	シルト	地山ブロック多く含む 煙道堆積土
9	10YR 3/3 暗褐色	シルト	柱痕跡
10	10YR 3/4 暗褐色	シルト	地山小ブロック含む 柱穴掘り方埋土
11	10YR 4/6 褐色	シルト	地山粒多く含む 柱穴掘り方埋土
12	10YR 3/3 暗褐色	シルト	地山小ブロック含む 柱穴掘り方埋土
13	10YR 3/4 暗褐色	シルト	地山ブロック多く含む 柱抜き取り痕跡
14	10YR 3/2 黒褐色	シルト	地山粒含む 柱痕跡
15	10YR 4/1 褐灰色	シルト	地山粒含む 柱痕跡
16	10YR 4/2 灰黄褐色	シルト	地山ブロック多く含む 柱穴掘り方埋土
17	10YR 4/3 ぶい黄褐色	シルト	地山ブロック多く含む 柱穴掘り方埋土
18	10YR 3/4 暗褐色	シルト	地山ブロック含む 柱抜き取り痕跡
19	10YR 4/4 褐色	シルト	地山ブロック多く含む 柱穴掘り方埋土
20	10YR 3/3 暗褐色	シルト	柱痕跡
21	10YR 4/3 ぶい黄褐色	シルト	地山ブロック多く含む 柱穴掘り方埋土
22	10YR 3/4 暗褐色	シルト	地山小ブロック含む 柱穴掘り方埋土

第23図 第12号竪穴住居跡

【堆積土】3層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

【壁】第III層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い南西隅部で20cmである。

【床】第III層を床としている。

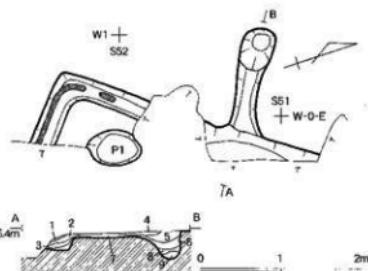
【カマド】住居西壁に設置されており、煙道・煙出しピットが確認された。煙道は軸長132cm、基部幅40cm、基部深さ2cmで、底面はほぼ平坦である。煙出しピットの平面形は軸径54cm×横断径38cmの楕円形で、深さは38cmである。

【柱穴】検出されなかった。

【周溝】南西隅部に残存する。幅28~30cm、深さ3~7cm。周溝内の壁側に沿って幅6~8cm、深さ3~5cmの壁材痕跡を確認した。

【貯蔵穴】住居南西部から1基のピット(P1)を検出した。P1の平面形は長径70cm×短径57cmの楕円形で、床面からの深さは15cmである。P1は、位置・形状・規模から貯蔵穴と考えられる。

【遺物】住居堆積土から土師器が出土したが、細片のため図示できなかった。



No.	土色	土質	備考
1	7.5YR 3/3 暗褐色	シルト	地山粒含む
2	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト	焼土少量含む
3	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト	地山粒含む
4	7.5YR 4/4 褐色	シルト	煙道堆積土
5	5YR 2/2 黒褐色	シルト	燒土・木炭粒多く含む 煙道ピット堆積土
6	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト	木炭粒含む 煙道ピット堆積土
7	7.5YR 4/6 褐色	シルト	カマド・煙道堆積土
8	5YR 2/3 暗褐色	シルト	木炭粒少量含む 煙道ピット堆積土
9	10YR 4/6 褐色	シルト	煙道ピット堆積土

第24図 第13号堅穴住居跡

第14号堅穴住居跡(第25・26図)

【位置・確認面】S60~69・W0~6の第III層上面で確認。

【平面形・規模】南東隅部が壊乱により破壊されているが残存部から一辺3.8mの方形であると考えられる。

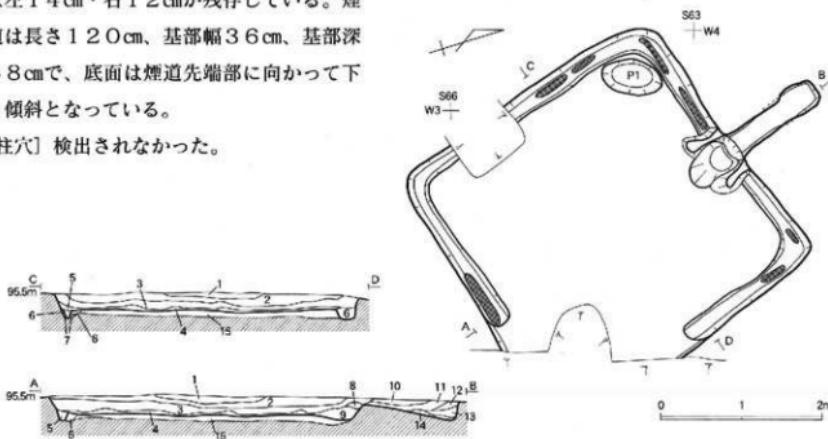
【堆積土】4層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

[壁] 第III層を壁としており、若干開き気味に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い西辺部で22cmである。

[床] 挖り方埋土を床としており、平坦である。

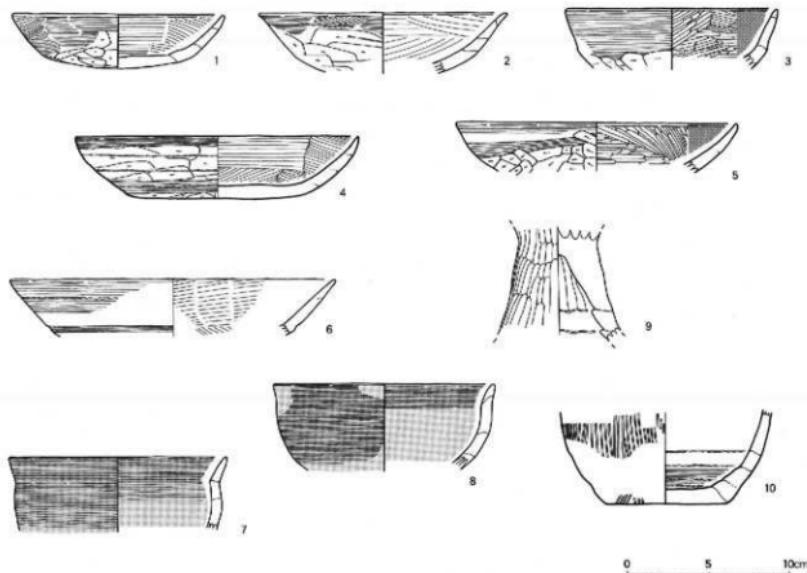
[カマド] 住居北壁に設置されており、燃焼部及び煙道が確認された。燃焼部の底面は床面を浅く掘りくぼめて形成しており、幅48cm、奥行72cm、床面からの深さ6cmである。燃焼部底面の左右に、灰白色粘土で側壁が形成されている。側壁は長さ約56cm、高さは左14cm・右12cmが残存している。煙道は長さ120cm、基部幅36cm、基部深さ8cmで、底面は煙道先端部に向かって下り傾斜となっている。

[柱穴] 検出されなかった。



No.	土色	土質	備考
1	10YR 2/2 黒褐色	シルト	
2	10YR 3/2 黒褐色	シルト	
3	10YR 2/3 黒褐色	シルト	
4	10YR 3/3 暗褐色	シルト	
5	10YR 2/3 黒褐色	シルト	
6	10YR 2/3 黒褐色	シルト	地山ブロック含む 周溝埋土
7	10YR 4/6 褐色	シルト	周溝埋土
8	10YR 3/2 黒褐色	シルト	カマド内堆積土
9	5YR 3/4 暗赤褐色	シルト	焼土多く含む カマド内堆積土
10	10YR 2/3 黒褐色	シルト	煙道堆積土
11	10YR 3/2 黒褐色	シルト	焼土・地山粒少量含む 煙道堆積土
12	10YR 2/3 黒褐色	シルト	煙道堆積土
13	10YR 2/3 黒褐色	シルト	焼上・地山粒多く含む 煙道堆積土
14	10YR 2/3 黒褐色	シルト	地山粒多く含む 住居掘り方埋土
15	10YR 4/1 褐灰色	シルト	地山粒含む 柱痕跡

第25図 第14号竪穴住居跡



No.	器種別	分類	肩位	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	同版
1	土師器坏	环B 2 a	床	ヨコナテ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	13.6	—	3.4	10-6
2	土師器坏		堆積土	ヘラナゲ→ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	15.5	—	—	
3	土師器坏		堆積土	ヨコナテ→ヘラケズリ	ヘラミガキ→墨色處理	不明	13.2	—	—	
4	土師器坏	环B 1	床・カマド側壁	ヘラケズリ→ヨコナテ	ヘラミガキ→墨色處理	ヘラケズリ	17.6	10.8	3.8	10-7
5	土師器坏		確認面	ヘラケズリ→ナテ→ヨコナテ	ヘラミガキ→墨色處理	不明	17.5	—	—	
6	土師器坏	环B 1	床直	ナテ	ヘラミガキ→墨色處理	不明	20.2	—	—	
7	土師器坏		堆積土	ヨコナテ→朱彩	ハケメ→ヨコナテ→朱彩	不明	13.5	—	—	
8	土師器坏		堆積土	ヨコナテ→朱彩	ナテ→口縁ヨコナテ→朱彩	不明	13.8	—	—	10-5
9	土師器高坏		堆積土	ヘラミガキ	受け部:不明 腹筋内面:ヘラオヤエ	—	—	—	—	10-4
10	土師器盖	盖B 1	床	ハケメ	ヘラナテ	ヘラケズリ	—	7.6	—	

第26図 第14号竪穴住居跡出土遺物

【周溝】住居南東部を除き全周する。幅11~28cm、深さ6~18cm。周溝内から断続的に幅5~8cm、深さ約7cmの壁材痕跡を確認した。左右のカマド側壁を除去した段階で、周溝はカマド側壁の直下まで及んでいることを確認した。また、左カマド側壁直下の周溝底面から、直径約20cmのピットが検出された。

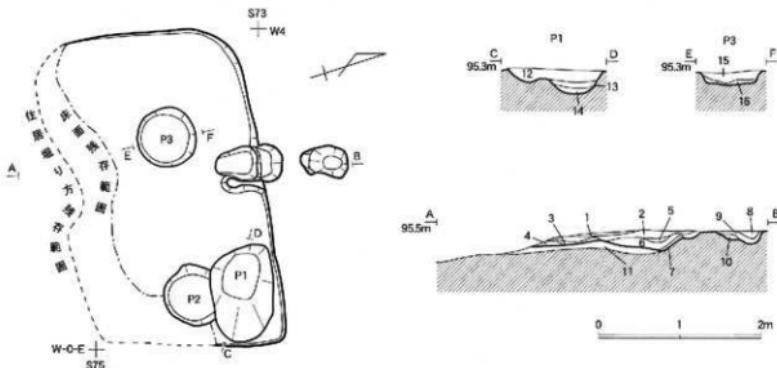
【貯蔵穴】住居北西隅部から1基のピット(P1)を検出した。P1の平面形は長径76cm×短径46cmの梢円形である。P1は、位置・形状・規模から貯蔵穴と考えられる。

〔遺物〕床面・住居堆積土・カマド側壁内部から土師器が、住居堆積土から須恵器が出土した。土師器は10点を図化できた。第26図1は床から出土した土師器壺である。また、床面直上から土師器壺（同6）が、住居床面及びカマド側壁を構成する灰白色粘土の中から土師器壺（同4）が出土した。

第15号竪穴住居跡（第27・28図）

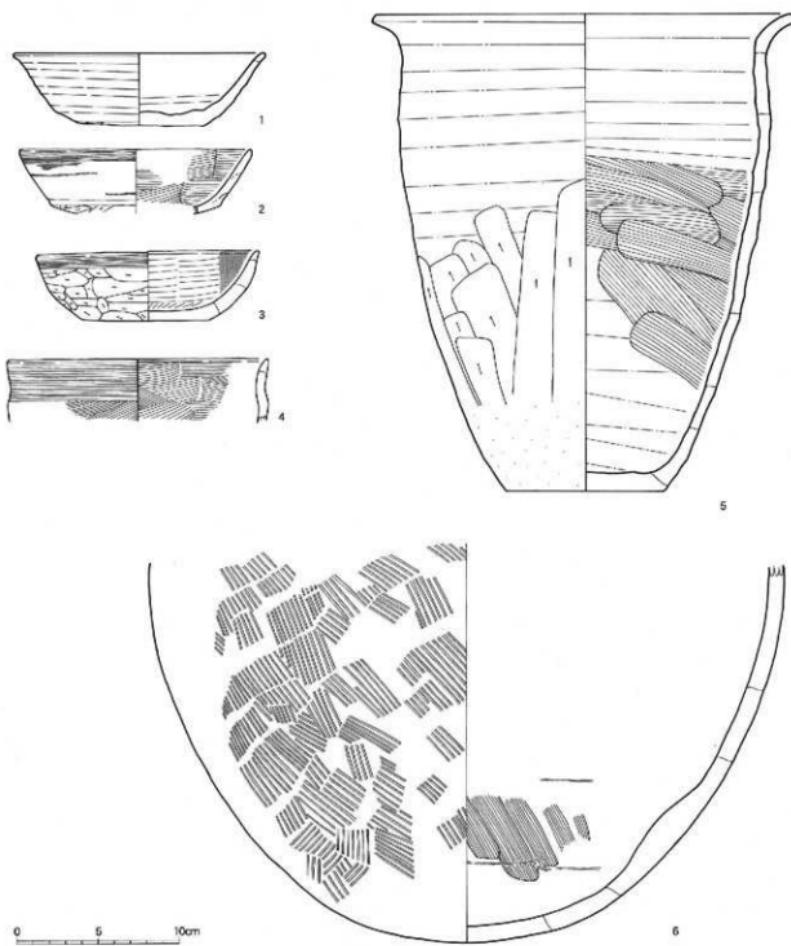
〔位置・確認面〕S 69～78/WO～6の第Ⅲ層上面で確認。

〔平面形・規模〕南部が削平により消失しているため全体形は不明だが、残存部から東西4.1m、南北2.6m以上の隅丸方形を基調とするものと考えられる。



No.	土色	土質	備考
1	10YR 2/3 黒褐色	シルト	
2	10YR 3/4 暗褐色	シルト	焼土・木炭・炭化物多く含む
3	10YR 3/4 暗褐色	シルト	
4	10YR 4/6 褐色	シルト	
5	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト	焼土・粘土多く含む
6	10YR 3/3 暗褐色	シルト	
7	10YR 4/6 褐色	シルト	
8	10YR 2/3 黒褐色	シルト	煙道堆積土
9	10YR 3/2 黒褐色	シルト	煙道堆積土
10	7.5YR 4/4 褐色	シルト	煙道堆積土
11	10YR 3/3 暗褐色	シルト	地山土多く含む 住居掘り方理土
12	5YR 3/4 暗赤褐色	シルト	地山粒・木炭粒含む
13	5YR 4/2 灰褐色	粘土質シルト	
14	10YR 7/4 にぶい黄橙色	粘土	
15	5YR 2/4 極暗赤褐色	シルト	焼土粒少量含む
16	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト	

第27図 第15号竪穴住居跡



No.	器種別	分類	層位	外面調査	内面調査	底面調査	口径	底径	高さ	回数
1	須恵器	壺	堆積土	ロクロナデ	ロクロナデ	手持ちハラケズリ	15.6	8.6	4.5	10-9
2	土師器	壺	堆積土	ナテ	ヘラミガキ	不明	10.4	—	—	
3	土師器	壺	確認面	ヘラケズリ・口縁ヨコナデ	ヘラミガキ・黒色梵彌	ヘラケズリ	13.7	8	4.3	10-8
4	土師器	鉢	堆積土	体部ヘラナデ・口縁ヨコナデ	体部ヘラナデ・口縁ナデ	不明	16.2	—	—	
5	土師器	壺 C	床	ロクロナデ→下層ヘラケズリ	ロクロナデ→ヘラナデ	ヘラケズリ	24	9.8	29.8	10-10
6	須恵器	甕	床	平行タタキ	ヘラナデ	—	—	—	—	10-11

第28図 第15号竪穴住居跡出土遺物

【堆積土】7層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

【壁】第Ⅲ層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い北辺部で15cmである。

【床】掘り方埋土を床としており、平坦である。

【カマド】住居北壁に設置されており、燃焼部・煙道の基部及び先端部・煙出しピットが確認された。燃焼部の底面は床面を浅く掘りくぼめて形成しており、幅42cm、奥行52cm、床面からの深さ3cmである。燃焼部底面の右に灰白色粘土で側壁が形成されている。側壁は長さ約50cm、高さ13cmが残存している。煙道は軸長114cm、基部幅44cm、基部深さ9cmで、残存状態から、底面は基部から中央部までは上り傾斜で、中央部から先端部までは下り傾斜であったと考えられる。煙出しピットの平面形は軸径57cm×横断径38cmの不整梢円形で、深さは16cmである。

【柱穴】検出されなかった。

【貯蔵穴】住居北東隅部から1基のピット（P1）を検出した。P1の平面形は長径122cm×短径76cmの不整梢円形で、床面からの深さは21cmである。P1は、位置・形状・規模から貯蔵穴と考えられる。

【その他のピット】住居中央や北寄りから1基のピット（P2）を検出した。P2の平面形は径72cmの円形で、床面からの深さは23cmである。

【遺物】床面・住居堆積土から土師器・須恵器が出土した。土師器4点と須恵器2点を図化できた。土師器甕及び須恵器甕（第28図5・6）はP1埋土の直上から出土したもので、2個が並んで置かれていたと考えられる。

第16号竪穴住居跡（第29図）

【位置・確認面】S96～102/E3～W3の第Ⅲ層上面で確認。

【重複】第17号竪穴住居跡と重複し、これより古い。

【平面形・規模】東部が搅乱により、また、南西部が第17号竪穴住居跡により破壊されており、北西隅部以外残存していないため全体形は不明だが、残存部から一辺2.3m以上の方形を基調とするものと考えられる。

【堆積土】3層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

【壁】第Ⅲ層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い北辺部で17cmである。

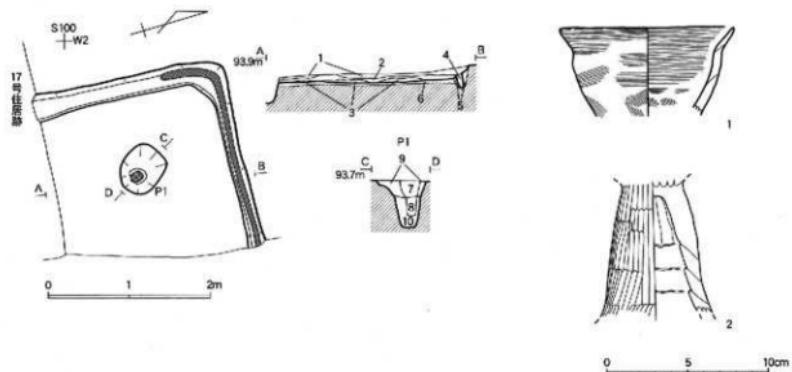
【床】掘り方埋土を床としており、平坦である。

【柱穴】北西隅部付近から1基のピット（P1）を検出した。P1の平面形は長軸60cm×短軸50cmの不整長方形で、床面からの深さは58cmである。P1内から径14cmの円形の

柱痕跡を確認した。P1は位置・形状・規模から主柱穴と考えられる。また、P1には柱材の抜き取り痕跡が認められる。

【周溝】住居残存範囲を全周する。幅15~26cm、深さ8~16cm。周溝の北西隅部から北辺部にかけての範囲から、幅6~9cm、深さ8~12cmの壁材痕跡を確認した。

【遺物】住居堆積土から土師器・須恵器が出土した。確認面出土の土師器鉢（第29図1）及び、土師器高杯（同2）の2点を図化できた。鉢は強い火熱を受けたのか、赤変している。



No.	土色	土質	備考
1	10YR 3 / 3 暗褐色	シルト	
2	10YR 3 / 4 暗褐色	シルト	
3	10YR 4 / 6 褐色	シルト	
4	7.5YR 3 / 3 暗褐色	シルト	壁材痕跡
5	10YR 3 / 4 暗褐色	シルト	周溝埋土
6	10YR 4 / 6 褐色	シルト	住居掘り方埋土
7	10YR 3 / 2 黒褐色	シルト	地山粒少量含む 柱抜き取り痕跡
8	10YR 3 / 3 暗褐色	シルト	地山粒多く含む 柱痕跡
9	10YR 5 / 6 黄褐色	シルト	柱穴掘り方埋土
10	10YR 4 / 6 褐色	シルト	柱穴掘り方埋土

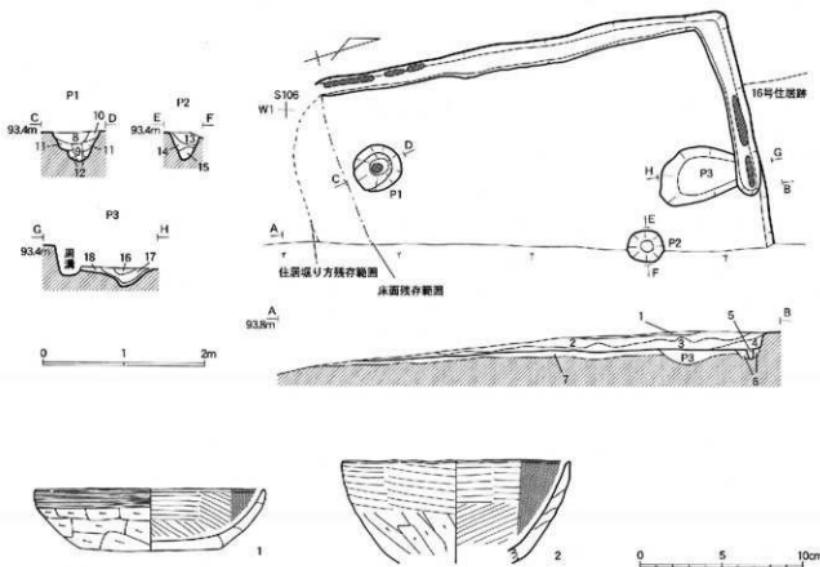
No.	器種別	層位	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底面	器高	図版
1	土師器鉢	確認面	ナード口縁コナデ	ヨコナデ	不明	10.8	—	—	
2	土師器高杯	確認面	ヘラミガキ	受け部:不明	器部内面:ヘラオサエ	—	—	—	10-12

第29図 第16号竪穴住居跡と出土遺物

第17号竪穴住居跡（第30図）

【位置・確認面】S 99~108/E 3~W 3の第Ⅲ層上面で確認。

【重複】第16号竪穴住居跡と重複し、これより新しい。



No.	土色	土質	備考
1	10YR 3 / 2 黒褐色	シルト	
2	10YR 3 / 4 暗褐色	シルト	地山粒少量含む
3	10YR 3 / 3 暗褐色	シルト	地山粒含む
4	10YR 3 / 4 暗褐色	シルト	地山粒・白色粘土少量含む
5	7.5YR 3 / 3 暗褐色	シルト	壁材痕跡
6	10YR 3 / 4 暗褐色	シルト	周溝埋土
7	10YR 3 / 3 暗褐色	シルト	住居掘り方埋土
8	7.5YR 3 / 4 暗褐色	シルト	柱抜き取り痕跡
9	7.5YR 4 / 3 褐色	シルト	柱痕跡
10	10YR 3 / 4 暗褐色	シルト	地山土少量含む 柱穴掘り方埋土
11	10YR 4 / 6 褐色	シルト	柱穴掘り方理土
12	7.5YR 3 / 4 暗褐色	シルト	柱穴掘り方理土
13	7.5YR 4 / 4 褐色	シルト	
14	7.5YR 3 / 4 暗褐色	シルト	焼土粒少量含む
15	7.5YR 5 / 4 にぶい褐色	シルト	
16	7.5YR 3 / 4 暗褐色	シルト	地山粒多く含む
17	10YR 4 / 6 褐色	シルト	
18	10YR 3 / 4 暗褐色	シルト	

No.	器種別	分類	層位	外 面 調 整	内 面 調 整	底 面 調 整	口 径	底 径	高 度	回 版
1	土師器环	杯B2b	床直	ヘラケズリ・口縁ヨコナデ	ヘラミガキ・墨色處理	ヘラケズリ	14.5	8.7	3.9	10-13
2	土師器跡		床直	ヘラケズリ・口縁ヘラミガキ	ヘラミガキ・墨色處理	不明	14.2	-	-	10-14

第30図 第17号竪穴住居跡と出土遺物

【平面形・規模】東部が搅乱により破壊されており、南西部のみ残存する。残存部から東西3m以上、南北5.1m以上の方形を基調とするものと考えられる。

【堆積土】4層に分けられる。いずれも自然堆積土である。

【壁】第Ⅲ層及び第16号竪穴住居跡の堆積土を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は、最も残存状態の良い北辺部で35cmである。

【床】掘り方理土を床としており、平坦である。

【柱穴】南西部から1基のピット（P1）を検出した。P1の平面形は一辺58cmの隅丸方形で、床面からの深さは44cmである。P1内から径12cmの円形の柱痕跡を確認した。P1は位置・形状・規模から半柱穴と考えられる。P1には柱材の抜き取り痕跡が認められる。

【周溝】北辺の一部を除き住居残存範囲を全周する。幅20～34cm、深さ10～12cm。北辺部及び西辺部の周溝内から、断続的に幅6～9cm、深さ8～12cmの埴材痕跡を確認した。

【その他のピット】住居北辺部から1基のピット（P2）を検出した。P2の平面形は径43cmの円形で、床面からの深さは40cmである。

住居北辺際から1基のピット（P3）を検出した。P3の平面形は長径98cm×短径68cmの不整椭円形で、床面からの深さは12cmである。

【遺物】床面直上・住居堆積土から土師器が出土し、床面直上出土の壺（第30図1）・鉢（同2）の2点を図化できた。

第2節 その他の出土遺物（第31～33図）

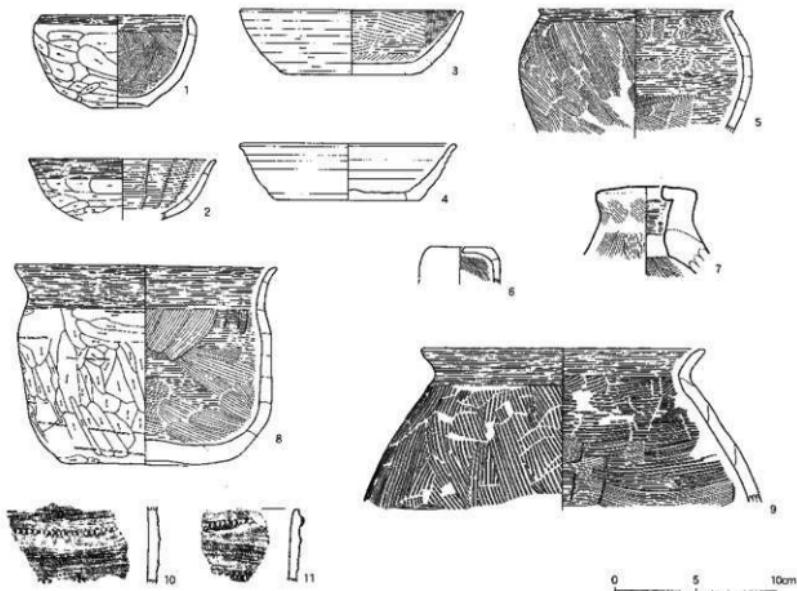
第31図1・8は第II層から出土した土師器壺（1）及び鉢（8）である。同2～6は第I層から出土した土師器壺（2・3）、鉢（5）、須恵器壺（4）、土師器蓋（6）である。同7・9は、搅乱から出土した土師器炉器台（7）、土師器壺（9）である。

同10・11は、第11号竪穴住居跡の床面直上及び堆積土から出土した続縄文土器で、器種は不明だが同一個体の破片と考えられる。細かい刺突文と複数の微隆起線文がみられ、こうした特長からこの土器は後北C2-D式に相当するものと考えられる。なお、これらの破片の胎土には海綿骨針が含まれているが、これは本遺跡のその他の土器には見られない特徴である。

第32図1～16は、遺構内外から出土した弥生土器の破片である。第32図3は3本一組の平行沈線によって、波状の文様を描いている。同11も同様な文様構成であるが、前者の沈線が1本ずつ描かれているのに対して、後者は櫛齒状の施文具で1度に描かれている。これらはその文様的特徴から弥生時代中期、十三塚式のものであると考えられる。同1及び2は同一個体と考えられ、複合口縁の下端に押圧文を施し、その上に5条の沈線文を平行に施して

いる。また、同5は口唇部に縄文を施し、複合口縁の下端に押圧文を施している。これらはその文様的特徴から弥生時代後期、天王山式のものであると考えられる。

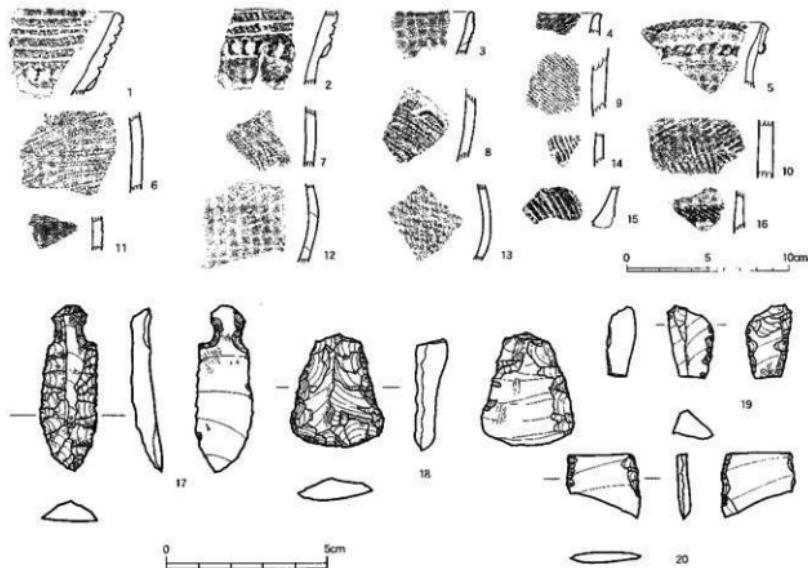
第33図1及び2は搅乱出土の須恵器破片で、器種は甕と考えられる。これらの破片は、割れ口が消耗しているのが観察された(網点部)。本来の器が破損した後、破片を砥石として転用したものと考えられる。



No.	器種別	層位	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	縦高	図版
1	上師巻模	第II層	ヘラズリ→口縁ヨコナテ	ヘラナテ→口縁ヨコナテ	ヘラズリ	10	3.4	5.7	11-4
2	土師巻环	第I層	ロクロズリ→ロクロナテ	ヘラミカキ→墨色施墨	ヘラ切り→ヘラズリ	13.9	8.8	4.1	
3	十師巻环	第I層	ヘラズリ→口縁ヨコナテ	ヘラミカキ	不明	11.5	—	—	11-2
4	須恵器环	第I層	ロクロナテ	ロクロナテ	回転ヘラ切り	13.4	9.1	3.5	11-1
5	上師巻鉢	第I層	ヘラナテ→口縁ヨコナテ	ヘラナテ→口縁ヨコナテ	不明	12	—	—	11-3
6	上師巻弦?	第I層	ナシ	ナシ	—	—	—	—	
7	上師巻炉蓋台	搅乱	ナシ	受付基・ヘラナテ	裏面内面・ヘラナテ	6.7	—	—	11-5
8	土師器鉢	第II層	ヘラズリ→口縁ヨコナテ	ヘラナテ→口縁ヨコナテ	ヘラズリ	16.2	11.5	12.4	11-7
9	土師巻甕	搅乱	体部ハケメ→山巒ヨコナテ	ヘラナテ・ハケメ→口縁ヨコナテ	不明	17.5	—	—	11-6

No.	器種別	層位	文	様	図版
10	続縄文上器	11住床底	刺突文・微隆起線文		11-8
11	続縄文上器	11住堆積土	刺突文・微隆起線文		11-9

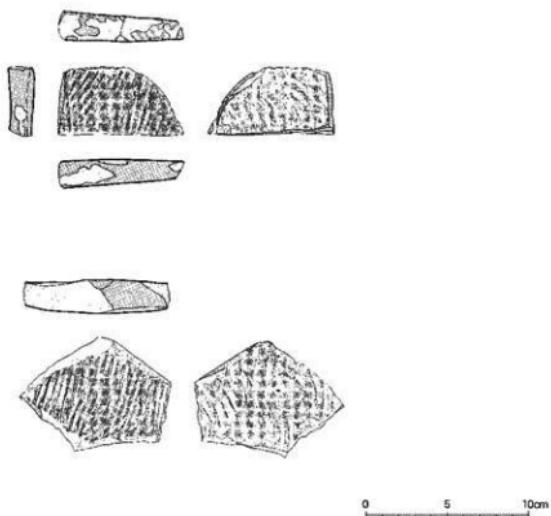
第31図 その他の出土遺物 (1)



No.	器種別	層位	文様	図版
1	弥生土器	B区擾乱	複合口縁 RL繩文→沈線文 押圧文	11-11
2	弥生土器	5住堆積土	RL繩文→沈線文 押圧文	11-12
3	弥生土器	出土地不明	平行沈線文 (1本描き3本組)	11-14
4	弥生土器	5住堆積土	撚糸文 r	
5	弥生土器	表土	口唇部LR繩文 押圧文	11-10
6	弥生土器	B区擾乱	LR繩文	
7	弥生土器	B区擾乱	LR繩文	
8	弥生土器	8住確認面	LR繩文	
9	弥生土器	B区擾乱	撚糸文 r	
10	弥生土器	出土地不明	LR繩文	
11	弥生土器	4住確認面	平行沈線文 (柳葉状工具による同時施文)	11-13
12	弥生土器	11住堆積土	LR繩文	
13	弥生土器	B区擾乱	RL繩文	
14	弥生土器	B区擾乱	撚糸文 r	
15	弥生土器	B区表様	撚糸文 r	
16	弥生土器	7住P4堆積土	RL繩文	

No.	器種別	層位	材質	全長	全幅	厚さ	備考	図版
17	石匙	表土	頁岩	5.2	1.8	0.7		11-16
18	亂状石器	B区擾乱		3.7	2.9	1		11-17
19	不定形石器	B区擾乱	チャート	2.3	1.3	0.9		
20	不定形石器	11住堆積土	頁岩	2.1	2.3	0.4		

第32図 その他の出土遺物 (2)



No	器種別	層位	文様	図版
1	須恵器甕?	B区擾乱	外面：平行斜線 内面：押え具痕（同心円） 磨耗痕（網点部）	
2	須恵器甕?	B区擾乱	外面：平行斜線 内面：押え具痕（同心円） 磨耗痕（網点部）	

第33図 その他の出土遺物（3）

第4章 考 察

今回検出された遺構は竪穴住居跡が17軒である。また、遺構の内外から遺物が出土した。ここでは主に住居跡に伴うと考えられる遺物の編年的位置付けと、検出された竪穴住居跡の機能時期と特徴について若干の考察を加える。ただし、検出された住居跡は後世の搅乱を強く受けているために全容が判明しないものが多く、遺物の器種構成や比率についても、信頼性の高い情報は得られ難いものと考えられる。この点も考慮した上で考察を進めていきたい。

第1節 出土遺物の考察

17軒の竪穴住居跡の中で、床面、あるいは貯蔵穴などからその住居に伴うと考えられる状態で遺物が出土したのは第3・5・6・11・14・15・17号住居跡の7軒である。ここではまず、各住居跡に伴うと考えられる遺物を器種毎に分類した上で、一定のまとまりによって土器群を設定し、その編年位置付けを考えていくこととする。

1 分 類

上記した7軒の竪穴住居に伴うと考えられる遺物は土師器壺・高壺・鉢・碗・器台・壺・甕・台付甕・櫃・須恵器壺・甕である。以下、器種毎に分類する。

○土師器

〔壺〕 いずれもその製作に際してロクロを使用していない。比較的器高の高いもの（壺A）と、低いもの（壺B）に大別される。

壺A：底部が残存するものはいずれも平底で、口径に対して底径が著しく小さい。体部と口縁部の境目に段あるいは屈曲を持つが、その位置が器高の中ほどより上にあるもの（壺A1）と、器高のほぼ中ほどにあるもの（壺A2）、きわめてゆるやかな段が器高の中間より上にあるもの（壺A3）に細分される。口縁部の形状は、壺A1は内湾気味に外傾する。壺A2は外反気味に外傾し、口唇部が厚い。壺A3は直線的に外傾する。器面調整はいずれもヘラミガキだが、壺A3は他に比較してやや粗雑である。

壺B：外面の底部と体部の境目に段あるいは沈線が巡るもの（壺B1）と、巡らないもの（壺B2）に細分される。壺B1はいずれも内面に段や稜は見られず、底部は判明しているものは平底風の丸底で、ヘラケズリによって整形されている。体部はわずかに内湾気味のもの、直線的に外傾するものがある。内面の調整はいずれもヘラミガキで、黒色処理が施されるものもある。壺B2はいずれも体部は内湾気味に立ち上がり、器面調整は体部外面下半がヘラケズリ、上半がナデである。内面の調整はヘラミガキあるいはナデで、さらに底部形状が平底風の丸底のもの（壺B2a）、平底のもの（壺B2b）に分けられる。

〔高坏〕1点のみ出土している。小型で、坏部はゆるやかに外傾し、口唇部が外方につまみ出されている。脚部は円錐台状で、透孔が3個設けられている。器面調整は丁寧なヘラミガキで、口縁部と脚部上半に朱彩が施されている。

〔鉢〕比較的大型の、器高の高い坏状の器形を呈するもので、器面調整は外面下半がヘラケズリ、上半が横位のヘラケズリまたはヘラナデである。内面はいずれもヘラミガキの後黒色処理を施している。

〔挽〕1点のみ出土している。平底で、体部は内済気味に立ち上がる。器面調整は内外ともヘラミガキである。

〔器台〕全体形の判明するもの4点、脚部のみのもの2点がある。脚部がゆるやかに外反しつつ裾が広がるもの（器台A）と、円錐台状のもの（器台B）とに大別される。

器台A：全体形のわかるものの受け部は脚部との境に段を持たず、ゆるやかに内済する。いずれも受け部から脚部にかけての貫通孔を有する。器面調整はいずれも非常に丁寧なヘラミガキで、朱彩が施されている。透孔は6個のものと4個のものがある。

器台B：全体形のわかるものの受け部は、脚部との境が有段のものと無段のものがある。貫通孔はあるものが1点、ないものが3点である。器面調整はヘラミガキで、朱彩を施されているものが2点ある。透孔は3個のものが1点、2個のものが1点、透孔の無いものが2点である。

〔壺〕大型のもの（壺A）と、小型のもの（壺B）に大別される。

壺A：4点出土しているが全体形のわかるものではなく、底部から体部にかけてのみのものが3点、口縁部のみのものが1点である。前者はいずれも体部が膨らむ器形で、器面調整は外面がヘラミガキ、内面がヘラナデあるいはヘラミガキである。朱彩を施しているものが2点ある。口縁部のみのものは複合口縁で、外面は頸部との境に段を有するが、内面は無段で頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反する。器面調整はヘラミガキである。

壺B：2点が出土しており、うち全体形のわかるものは1点である。体部の形状はいずれも球形で、口縁部の形態は、厚めで、外反し短いもの（壺B1）と、やや中膨らみ気味に外傾し、長いもの（壺B2）に細分される。器面調整は内外ともヘラミガキである。

〔甕〕ロクロ未使用で体部が球状に膨らむもの（甕A）、ロクロ未使用で長胴形のもの（甕B）、ロクロを使用し、長胴形のもの（甕C）に大別される。

甕A：さらに口径10～15cm程度の中形品（甕A1）と、口径20cm以上の大形品（甕A2）に細分される。甕A1は、全体形の判明しているものが1点、口縁部から体部上半のものが1点である。前者は口径と比較して底径が小さく、最大径は体部中間よりやや下方にある。口縁部は外反する。後者は、口縁部はやや厚めで直線的に外傾する。器面調整はいずれも体部は内外ともヘラナデ、口縁部は内外ともヨコナデである。甕A2は、

口縁部から体部上半のみのものが1点、口縁部のみ欠損しているものが1点である。前者は、口縁部は厚く、外傾する。器面調整は体部外面が縦位の、内面が横位のヘラナデ、口縁部は内外ともヨコナデである。後者は底部から体部が直線的に外傾し、体部中間あたりで湾曲してすぼまり、最大径は体部中間よりやや上方にある。器面調整は体部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。

甕B：全体形の判明するものはないが、体部形状がやや中膨らみで、体部の最大径が体部中ほどに位置するもの（甕B 1）、直線的に外傾し、体部の最大径が体部上端に位置するもの（甕B 2）に細分される。甕B 1は、口縁部が判明しているものはいずれも外傾し、やや短い。また、頸部に段やくびれを持たない。器面調整は体部外面が縦位のヘラナデあるいはハケメ、内面が横位のヘラナデあるいはヘラケズリ、口縁部は内外ともヨコナデである。甕B 2は、体部と口縁部との境にくびれをもち、口縁部は厚めで強く外傾する。器面調整は体部外面が縦位のヘラケズリ、内面が横位のヘラナデ、口縁部は内外ともヨコナデである。

甕C：平底で、体部はやや外傾しつつ立ち上がる。口縁部は強く外反する。器面調整はロクロナデの後、外面下半に縦位のヘラケズリ、内面中ほどに横位のヘラナデを施す。底面はヘラケズリである。

〔台付甕〕 1点のみ出土している。台下部を欠損しているが、体部は球状で最大径が体部中間よりやや上部にある。口縁部は基部がほぼ直立し、上半は外反する。器面調整は体部が内外ともハケメ、口縁部が内外ともヨコナデである。

〔瓶〕 1点のみ出土している。単孔式で、体部は内湾しつつ立ち上がり、やや深い。口縁部は折り返し口縁で、折り返しの外面にユビオサエ痕が並ぶ。

○須恵器

〔壺〕 1点のみ出土している。底径が大きく、体部は直線的に外傾する。器面調整は体部は内外ともロクロナデ、底面は手持ちヘラケズリである。切り離し手法は不明である。

〔甕〕 1点のみ出土している。底部～体部下半のみ残存しており、器面調整は外面が平行タタキ、内面は下部にヘラナデが施される以外不明である。

2 土器群の設定と編年的位置

表1は、各分類の住居毎の遺物数である。出土遺物の絶対数が少なく器種構成などを分析することが困難な住居が多いが、壺の出土状況に着目すると、第3・6号住居跡では壺A 1が出土しているのに対して、第11・14号住居跡では壺B 1が出土しており、様相に違い

が見られる。以下、この相違点によって2つの土器群を設定し、各土器群の編年的位置を検討していくことにする。

種別	土 器 群												須恵器			
	壺		高 壺	鉢	楕	臺	壺			甌			台 付 甌	瓶	壺	甌
分類	壺 A 1	壺 A 2	壺 A 3	壺 B 1	壺 B 2a	壺 B 2b	壺 台 A B	壺 台 A B	壺 A	壺 B 1	壺 B 2	甌 A 1	甌 A 2	甌 B 1	甌 B 2	甌 C
3住	2	1	1				1	1	1	4	4	1	2			1
5住												1				
6住	1								1						1	
11住			2	1			2						2	4	1	
14住			2	1									1			
15住														1		1
17住					1	1										

表1 住居毎の出土遺物数

第1群：壺A1を伴う住居（第3・6号住居跡）の遺物によって構成

器種構成=壺A1, A2, A3・高壺・楕・器台A, B・壺A, B1, B2・甌

A1・台付甌・瓶

第2群：壺B1を伴う住居（第11・14号住居跡）の遺物によって構成

器種構成=壺B1, B2a・鉢・甌A2, B1, B2・須恵器壺

第1群土器は、器種構成や形態的特徴から古墳時代前期の塙釜式に位置付けられるものと考えられる。

県内の塙釜式期の土器編年については、近年の遺物数の増加に伴って細分化が図られている。ここでは、辻秀人氏によって提示された編年案（辻：1994・1995）との対比を行う。

辻氏の編年案は東北地方南部の古墳出現時期の土器について編年を試みたもので、該期をI～III期に大別し、さらにI期をI-1～2に、II期をII-1～2に、III期をIII-1～4に細分した上で、いわゆる塙釜式に該当するのはII期及びIII期であるとしている。さらにII期においては多様な形態の小型鉢（本報告書では「壺」という名称を用いている）と小型器台とが比較的ゆるやかな共伴関係を保っている状態であるのに対して、III期においては定形化した小型丸底鉢（辻氏編年案における器形分類「鉢G」にあたり、その特徴は「丸底で、体部が半球状で、体部と口縁部との境となる段が器高の中間より下に位置しており、その底部、あるいは体部の形状から小型器台に乗せることを前提に製作された鉢」である）と小型器台とが密な共伴関係を示すという点に両期の画期を求めている。

本土器群の坏及び器台に着目すると、坏A1・坏A3は大橋遺跡第3号住居跡（宮城県教育委員会：1980）にその類例が見られ、辻氏編年案における器形分類では「鉢A」にある。器台Aは藤田新田遺跡SD115（宮城県教育委員会：1994）に、器台Bは野田山遺跡第4号住居跡（宮城県教育委員会：1992）に類例が見られる。器台A及びBはいずれも辻氏の分類の「器台D1」に該当するものである。それぞれの類型の編年的位置は、「鉢A」がII期からIII-1期にかけて見られる器形、「器台D1」がI期のある時期からIII期まで存続する器形であるとしている。「器台D1」は変化に富んだ細部形態の器台を包括した類型であるが、全体的な傾向として時期の下降に伴い脚部の縮小・透孔数の減少・器面調整の簡略化などが生じる点が指摘されており、特に透孔数は、II期では6個や4個などが多く見られるが、III期では3個が一般的でIII-3期には透孔が消失したものが現れ、III-4期には透孔の無いものが一般化するとしている。これらの点を考慮すると、本土器群の器台Aは器台Bより古式を呈する形態であり、器台AはII期に、器台BはIII-3期に位置付けられるものと考えられる。ところで、本土器群には「定型化した小型丸底鉢」が見られない。この器形はII期とIII期とを区別する重要な指標であり、これが見られないということから本土器群の編年的位置はIII期まで下降することはないと考えられる。一方、器台Bは上記のとおりIII-3期に位置付けられるのが適当な形態であり、個々の器種の形態的特徴だけを考慮すると、異なる2時期のものが共存することとなる。最初に述べたとおり器種構成に欠落が生じている可能性は否定しきれないが、未だ定型化した小型丸底鉢を伴わず、多様な形態の坏（鉢）を使用している一方で、器台は新しい時期の形態となりつつあることから、本土器群はII期とIII期の過渡期に位置付けられるものと考えられる。

第2群土器は、器種構成や形態的特徴から栗団式～圓団寺下層式に位置付けられるものと考えられる。土師器坏に着目すると、坏B1は塩沢北遺跡第2群土器（宮城県教育委員会：1980）、八幡・大嶺八幡遺跡第2群土器（宮城県教育委員会：1991）に、また坏B2aは八幡・大嶺八幡遺跡第1群土器（宮城県教育委員会：1991）に、それぞれ類例が見られる。本土器群の坏を塩沢北遺跡第2群土器及び大嶺八幡遺跡第2群土器の坏とを比較すると、表2のようにまとめられる。

	本遺跡第2群土器	塩沢北遺跡第2土器群	八幡・大嶺八幡遺跡第2土器群
体部外側の段	有段・無段が混在	全て有段	有段・無段が混在
外面に対応した内面の段	無段	無段が主体的・一部有段	無段
有段の坏の底部形状	平底風の丸底	丸底が主体的・一部丸底風の平底	平底
無段の坏の底部形状	平底風の丸底	—	平底

表2 各土器群の坏の比較

該期の土師器坏は、時期の下降に伴って無段平底のものが増加する傾向が指摘されている。

この点に着目すると、塩沢北遺跡第2群土器では無段平底のものが見られないことから本土器群より古い時期のものと考えられる。また八幡・大嶺八幡遺跡第2群土器では無段の坏は全て平底であることから、本土器群より新しい時期のものと考えられる。それぞれの土器群の実年代は塩沢北遺跡第2群上器は7世紀中頃～後葉、八幡・大嶺八幡遺跡第2群土器は8世紀後半と考えられていることから、本土器群は7世紀末～8世紀前半に位置付けられると考えられる。

第2節 穫穴住居跡の考察

ここでは検出された住居跡の機能時期を推定するとともに、各住居跡の軸線方向について考えることとする。

1 各住居跡の機能時期

第1節において導き出されたとおり、第1群上器は塩釜式期で辻氏編年のII期～III期の過渡期、また、第2群上器は栗沢式期～国分寺下層式期、実年代では7世紀末～8世紀前半と位置付けることができた。これを元に各遺構の機能時期を推定する。

第3号住居跡は第1群土器のほとんど全ての器種構成を含んでいることから、その機能時期は第1群土器の編年的位置と同様、塩釜式期のII期～III期の過渡期と考えられる。また、第6号竪穴住居の遺物は量的には少ないものの、いずれも塩釜式期でもII期の範疇でとらえることができる、その編年位置が機能時期と考えられる。

第11号住居跡は第2群土器の全ての器種構成を含んでいることから、この機能時期は第2群土器の編年位置と同じ栗沢式期～国分寺下層式期、実年代では7世紀末～8世紀前半と考えられる。また、第14号住居跡も同様な遺物の様相を呈することから、その機能時期も同時期と考えられる。

これら4軒の他に遺物を伴うのは第5・15・17号住居跡であるが、遺物量が少なく各土器群と遺物の形態が異なることから比較はできない。ここでは、個々の遺物を検討することによってその機能時期をおおまかに推定する。

第5号住居跡に伴う遺物は壺A2が1点のみである。壺A2は南小泉遺跡第9号住居跡（仙台市教育委員会：1990）に類例が見られ、古墳時代中期の南小泉式期のものと考えられる。よって本住居跡の機能時期も古墳時代中期、南小泉式期と推定される。

第15号住居跡に伴う遺物は土師器壺C及び須恵器壺Aが1点づつである。土師器壺Cは南小泉遺跡第18号住居跡（仙台市教育委員会：1994）に類例が見られ、表杉の入式期のものと考えられる。よって本住居の機能時期も表杉の人式期と推定される。

第17号住居跡に伴う遺物は坏B2b及び鉢が1点づつである。いずれも清水遺跡第VII群上器に類例が見られ、国分寺下層式と考えられる。しかしこの2点の遺物のうち坏の形態は

国分寺下層式期を中心とした前後の時期に普遍的に見られるもので、これらの遺物をもって時期決定はできない。ゆえに本住居跡の機能時期はおおまかに国分寺下層式を中心とした時期ととらえておきたい。

以上、出土遺物の特徴からその機能時期の推定が可能だった7軒の住居跡について、それぞれの住居跡を時期ごとにまとめると以下のようなになる。

塙釜式期	···	2軒	(第3・6号住居跡)
南小泉式期	···	1軒	(第5号住居跡)
栗沢式期～国分寺下層式期	···	2軒	(第11・14号住居跡)
国分寺下層式を中心とした時期	···	1軒	(第17号住居跡)
表札の入式期	···	1軒	(第15号住居跡)

その他、第4・16号住居跡は遺物が伴わないものの、重複する遺構の機能時期が推定できたことから、ある程度その機能時期を類推することができる。

第4号住居跡は第5・第6号住居跡と重複し、これらの中で最も新しい。第6号住居跡は塙釜式期、第5号住居跡は南小泉式期であるため、本住居跡はそれ以降の時期の遺構であることが類推できる。

第16号住居跡は第17号住居跡と重複しこれより古い。第17号住居跡は国分寺下層式を中心とした時期であるため、本住居跡はそれ以前の時期の遺構であることが類推できる。

第6号住居跡 (塙釜式期)	→	第5号住居跡 (南小泉式期)	→	第4号住居跡 (それ以降)
第16号住居跡 (それ以前)	→	第17号住居跡 (国分寺下層式期)		

また、第1・2号住居跡及び第10・12号住居跡はそれぞれ重複しているが、いずれも機能時期を推定できなかつたため、ただ前後関係のみが判明しているに過ぎない。

第2号住居跡 (古)	→	第1号住居跡 (新)
第10号住居跡 (古)	→	第12号住居跡 (新)

2 住居跡の軸線方向

カマドを有する住居跡はカマド軸線を、それ以外の住居跡は南北方向に最も平行に近い壁の向きを基調として住居の方向を求めたところ、以下のようなグループに分けられた。

- A, 真北方向を向くもの···7軒 (第4・8・11・12・15・16・17号住居跡)
- B, 北北西方向を向くもの···3軒 (第1・2・14号住居跡)
- C, 北西方向を向くもの···2軒 (第3・6号住居跡)
- D, 北微東方向を向くもの···3軒 (第5・9・10号住居跡)
- E, 西北西方向を向くもの···2軒 (第7・13号住居跡)

遺跡の立地は緩やかな東斜面上で、調査区は南北方向に細長い形状をしており、標高はほ

ば同一だが、南側では徐々に標高を減じる。遺構は南側の低地を除いて通りなく検出されている。また、ごく近くに位置する遺構同士の軸線が異なる場合もあるため、これらのまとまりは地形のみを考慮した結果とは考えにくい。表2は、住居の方向と機能時期との対応を示したものである。時期不明のものが多いため断定はできないものの、機能時期と住居方向との間にはある程度の関係が見出せるものと考えられる。まとめると以下のようになる。

	塩釜式期	南小泉式期	栗囲～国分寺下層式期	国分寺下層式期	表杉の入式期	不明
真北			1(1)	1(1)	1	5(2)
北北西			1(1)			2
北西	2					
北微東		1				2
西北西						2(1)

表3 住居方向と機能時期 () はカマドを有する住居、内数

塩釜式期・・・北西方向

南小泉式期・・・北微東方向

栗囲式期以降・・・真北、北北西方向

また、カマドを有する住居跡は1軒を除いて全てが真北及び北北西方向を向いているが、これは地形や風向きなどをはじめとした諸条件を考慮した上で、この方向にカマドを設けるのが最適とされたためと考えられる。なお、本調査において検出された住居跡のうちカマド軸線が西北西を向いたものは第13号住居跡のみだが、本調査区の至近地で1989年度に行われた発掘調査において検出された第2・3号住居跡（藏王町教育委員会：1989）のカマド軸線方向が西北西であり、第13号住居跡のそれと同一方向である。このことから、堀の内遺跡において本住居跡が持つカマド軸線が特殊なものでないということがわかる。

ま　と　め

1. 堀の内遺跡は円田盆地南西部の高木丘陵東麓部の東斜面に位置しており、標高は約100m、盆地底部との比高は約20mである。
2. 今回、遺跡のはば中央を南北に縦断する形で約1,000mを発掘調査したところ、堅穴住居17軒が検出された。
3. 検出された堅穴住居の機能時期は、塙釜式期のものが2軒、南小泉式期のものが1軒、栗沢式期～国分寺下層式期のものが2軒、国分寺下層式期を中心とした時期のものが1軒、表杉の入式期のものが1軒、不明のものが10軒であった。
4. 遺構の内外から出土した遺物によって、本遺跡は縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代と非常に長期間にわたって人の生活の痕跡が残されていることがわかった。
5. 遺構に伴うものではないが、統繩文土器（後北C2-D式）の破片が出土した。器形は不明である。
6. 今回の調査によって、本遺跡は丘陵麓部の斜面上に帯状に築かれた集落であること、各時代で住居の分布にはほとんど偏りがないことがわかった。

引用・参考文献

- 小川淳一(1980)：「塙沢北遺跡 東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ」『宮城県文化財調査報告書第69集』
- 太田昭夫(1980)：「大橋遺跡 東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書第71集』
- 丹羽茂他(1981)：「清水遺跡 東北新幹線関係遺跡調査報告書V」『宮城県文化財調査報告書第77集』
- 菊地逸夫(1989)：「堀之内遺跡」『巣上市文化財調査報告書』
- 佐藤洋(1990)：「南小泉遺跡 第16～18次発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書第140集』
- 小村田速也(1991)：「八幡・大嶺八幡遺跡 合戦原遺跡ほか」『宮城県文化財調査報告書第140集』
- 青妻俊典・須田良平(1992)：「野川山遺跡」『宮城県文化財調査報告書第145集』
- 斎野裕彦(1994)：「南小泉遺跡 第22・23次発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書第192集』
- 後藤秀一・村田晃一(1994)：「藤田新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書第163集』
- 加藤道男(1989)：「宮城県における土器研究の現状」『考古学論叢II』
- 弥生時代研究会(1990)：「天王山式期をめぐっての検討会 記録集」
- 辻秀人(1994)：「東北南部における古墳出現期の土器編年 その1 会津盆地」
『東北学院大学論集 歴史学・地理学第26号』
- 辻秀人(1995)：「東北南部における古墳出現期の土器編年 その2」
『東北学院大学論集 歴史学・地理学第27号』

写 真 図 版



A区・B区全景



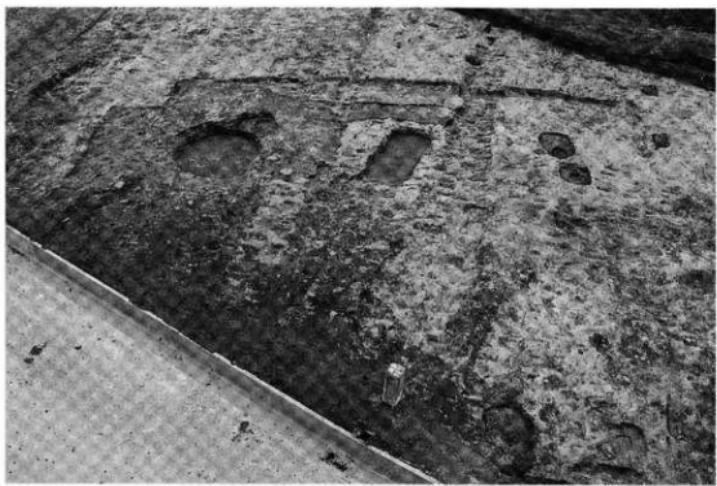
C区全景

写 真 図 版 1

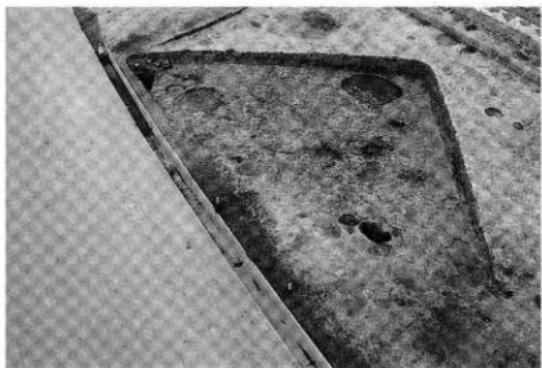
D区全景



第1号・2号窓穴住跡



写真図版 2



第3号竪穴住居跡



第3号竪穴住居跡
床面遺物出土状況



第3号竪穴住居跡
貯藏穴付近遺物出土状況

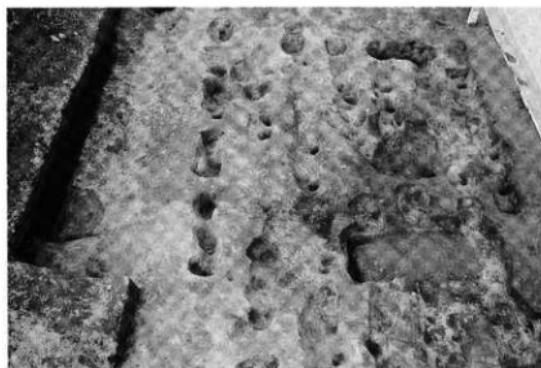
写真図版 3



第4·6号竪穴住居跡



第5号竪穴住居跡



第7·8号竪穴住居跡

写 真 図 版 4



第9号整穴住居跡

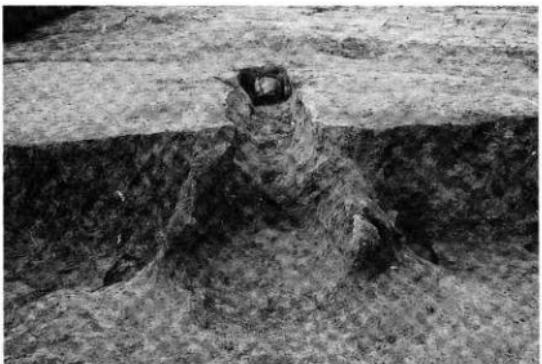


第10号整穴住居跡



第11号整穴住居跡

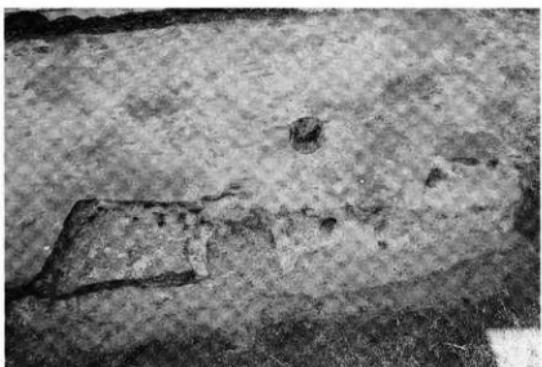
写 真 図 版 5



第11号竪穴住居跡
カマド



第12号竪穴住居跡



第13号竪穴住居跡

写真図版 6



第14号堅穴住居跡

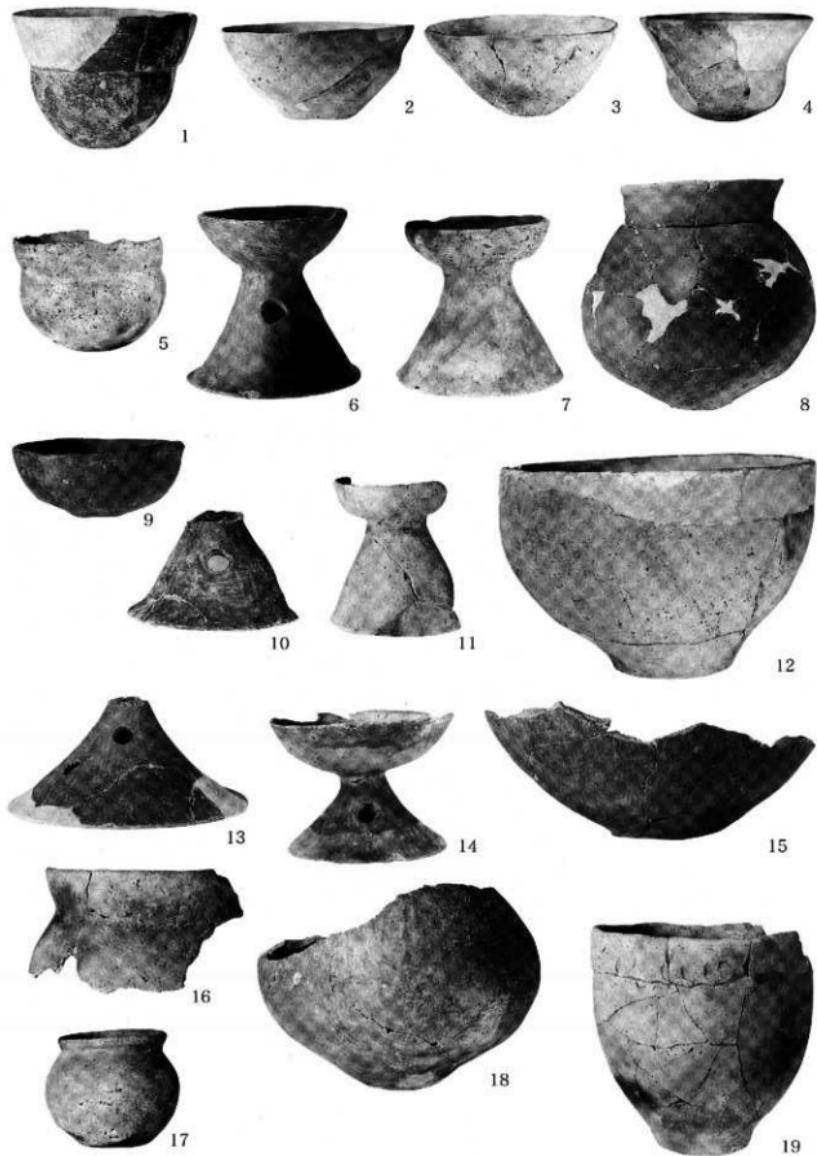


第15号堅穴住居跡

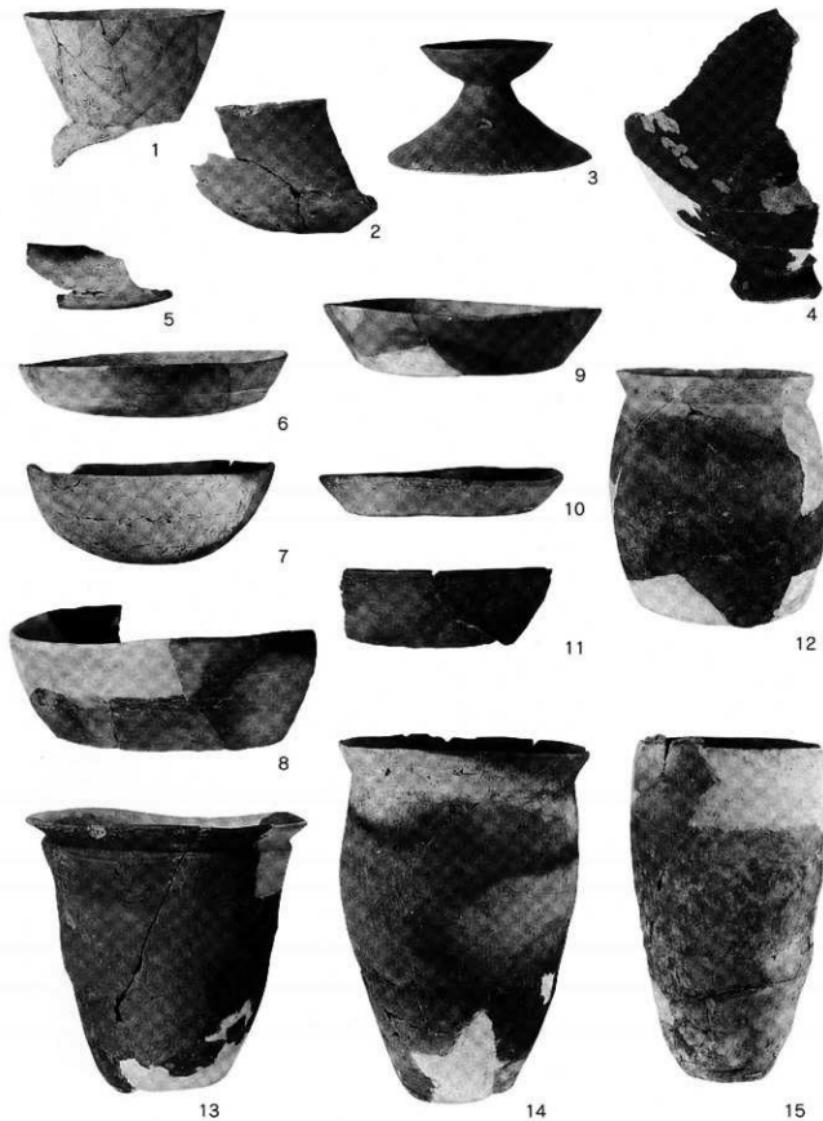


第16・17号堅穴住居跡

写 真 図 版 7



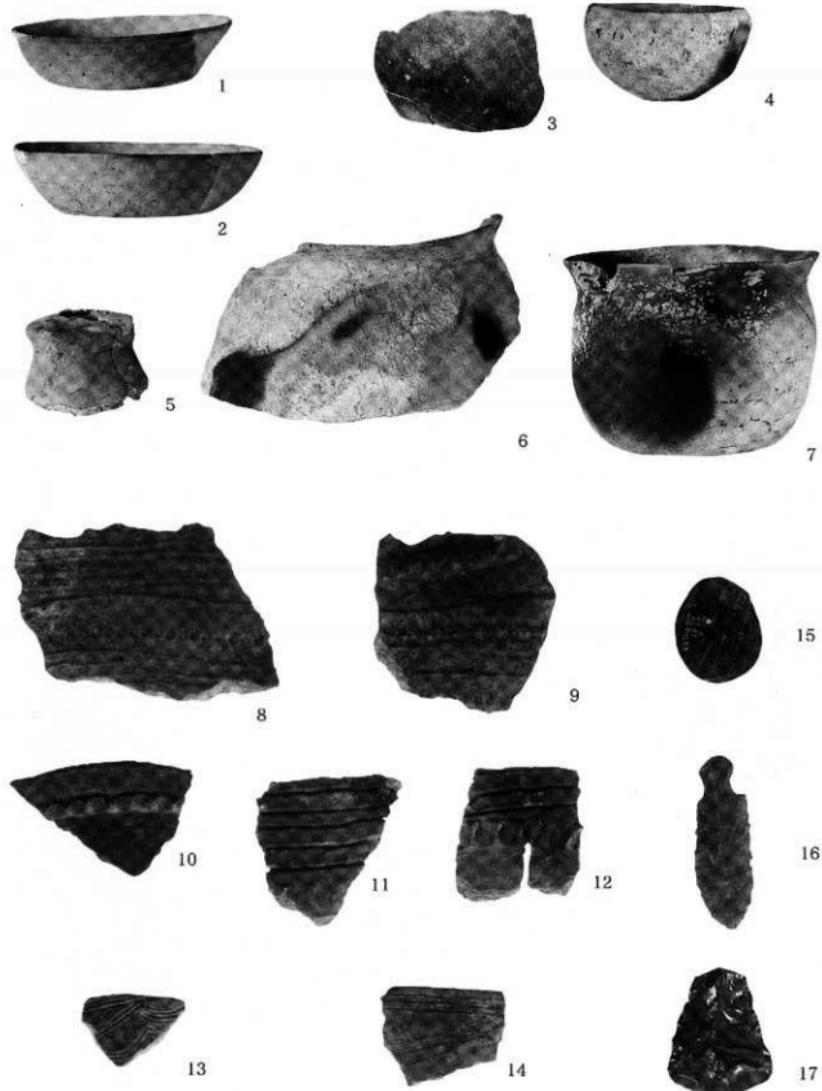
写真図版8 第3号竪穴住居跡出土遺物



写真図版9 第4・6・11号竪穴住居跡出土遺物
1・2………4住 3・4………6住
5～15………11住



写真図版10 第11・14・15・16・17号竪穴住居跡出土遺物
 1~3………11住 4~7………14住
 8~11………15住 12………16住
 13・14………17住



写真図版11 その他の出土遺物

藏王町文化財調査報告書第1集

堀の内遺跡

平成9年3月31日発行

発行 藏王町教育員会

宮城県刈田郡藏王町大字円田字西浦北10
〒989-0892 TEL (0224) 33-3007

印刷 株式会社 津田印刷

柴田郡大河原町字東原町13-5
TEL (0224) 52-5550

